ISSN 1340－5985

広島県立美術館

研究紀要

第8号

〔厳島図障屏画一覧〕補遺 …… 知念　理 1

児玉希望と水墨画（試論） …… 永井　明生 6

平成16年度美術館ネットワーク巡回展
「美術の探検！広島県ゆかりの美術展」実施報告 …… 松原　香織 50

南薫造『従軍日記』 …… 藤崎　綾 17

学校との連携事業「美術作品鑑賞授業」実施報告（2002～2004） …… 宮本真希子 1

2005

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.8

2005

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

南薫造『従軍日記』

藤　崎　　綾

広島県出身の洋画家・南薫造（1883・明治16～1950・昭和25）は、多くの日記や絵日記を残しており、広島県立美術館では御遺族の御協力の下、資料の公開・整理を行ってきた。本稿における『従軍日記』紹介は、広島県立美術館研究紀要第７号（2004・平成16年）掲載の『インド日記』に引き続き、南薫造資料の公開の一連作業として行うものである。

従軍日記は、1939(昭和14)年３月29日から同年５月21日までの約50日間、陸軍省の嘱託として中国に赴いた際の動向を記したもので、現地を持ち歩いて記した草稿のノートをもとに成立している。草稿冒頭には、次のような説明がある。「此日記帖は現地を持ち歩るいて記したものであるが当突の間に書いたので物事が前後したり、ぬけて居たり、誤字等も多く且つ終り頃は遂ニ他の紙片や、小手帖へ記したりしたので帰朝後多少訂正、又た他帖のも集めて中支那従軍日記として他の帖に清書した」。

草稿に説明を補い、他への書き付けを追記して完成された[1]従軍日記は、縦20.8×横15.8cmのノートに143ページにわたり横書きで記され、背表紙に「中支那従軍日記」とある。

従軍日記の冒頭によると、南の渡航前年の1938(昭和13)年、陸軍省は「帝展文展審査委員級以上の洋画家」に対し、中国での戦跡写生旅行の希望を募った。志願した南は、陸軍省嘱託として将官待遇で派遣されることになる。旅行中の交通・滞在費等は全て陸軍支給で、制作費には別途千円が給付された。出発前に、従軍中に得た画題で60号の作品を描き、陸軍省に寄贈することと、絵葉書作成のための素材を提供することを約している。従軍の日時が決定したのが出発の約10日前[2]。辞令と手当金を前日に受け取り[3]、旅行準備も慌ただしく東京を立った。同行者は、小林万吾（1870・明治２～1947・昭和22）と小林の助手で東京美術学校卒業生の鈴木貞三である。一行は３月29日に東京駅を立ち、同日は京都泊。翌日は広島まで移動し、翌31日に広島・宇品港から吉野丸で出航している。４月３日に揚子江に入り、最初の滞在地・上海に上陸。宿泊先は軍の宿舎のあるアスターハウスホテルである。上海で一行を迎えた斎藤肇（大佐）は広島県出身、南と同じ県立第一中学校の卒業生であった。斎藤は到着当初の近隣案内や、兵站部の上官への紹介など上海での手ほどきを行ったが、同地で実際に一行の接待や世話役を務めたのは、雨田という一等兵（日記途中で上等兵となる）である。雨田は東京美術学校油絵科予科で応召していたが、制作や視察に出かける一行の行程調整や自動車での送迎、時には美校師範科出の松林義英（広島県芦品郡出身）とともに現場で筆を執るなど[4]、南等に同行し親交を深めている。一行は滞在地を移しつつ、戦跡や名所などでスケッチを重ねた。日記に登場する写生場所は50か所近くにのぼる。現在確認できる南のスケッチブックは、「従軍寫生」と題したもの（28.2×24.5cm）と、「支那格子」（25.8×20.7cm）の２冊で[5]、鉛筆素描の他、水彩で丹念に彩色したものもある。

中国での主な旅程は、４月３日に上海に上陸、同月７日に蘇州に向かい、11日に再び上海に戻っている。蘇州行には雨田と松林も加わり、南等一行に10日まで同行した。13日に杭州に向かい、19日まで滞在。新々旅館に宿泊し、金井文彦と池田という藤島武二門下の従軍画家と知り合っている。19日

に上海に戻るも、一泊したのみで翌日南京に移動、南京ホテルに宿泊。同地では、大半の従軍画家の世話役であるという中根吾一（陸軍歩兵曹長）に会うとともに、漢口行きの船を待っていた恩地孝四郎とも顔を合わせている。25日に九江に向けて日龍丸に乗船。船上から蕪湖、馬當鎮、安慶、彭沢の町などを見つつ、28日九江に到着・上陸し、増田屋旅館に入った。30日に星子へ出発。星子では兵站部出張所に寝泊まりし、５月４日に九江に戻る途についた。漢口へと北上したい南に対し、小林は、高齢のためか虫害や不充分な食事に消耗し、また風景に関心がわかないこともあって帰国を望んだ。さらに暑さのために疫病の恐れも加わり、漢口行きが危ぶまれるなか、一行は翌５日に廬山に登った。偕行社という開館直後の建物に宿泊。かつて訪れたダージリンのような印象を受け、宿泊先も快適であったためか、非常にくつろいだ滞在となったようである。翌日下山し再び九江へ。南が希望していた漢口行きは、鈴木が体調を崩したことから帰国が万全と判断し断念。８日に出航する千山丸に乗船し、南京に戻ることとなった。翌日、南京着。宿は前回と同じ南京ホテルである。11日、南京より上海へ移動、アスターハウスホテルに宿泊。13日、小林は上海丸に乗船し、一足早く長崎へ向けて帰国の途についた。南と鈴木は16日出航の瑞穂丸という病院船に乗って中国を離れ、18日門司に到着。南は広島で肖像画制作の仕事があったため、広島駅で鈴木と別れる。数日広島に滞在し、21日に東京に向けて立つところで従軍日記は終わっている。

文展での連続受賞などにより、南は早くから画壇での地位を認められた。1916（大正５）年の第10回文展から若干33歳にして審査員を務め、以後も文展や帝展で審査員を歴任。1921（大正10）年には戦艦「陸奥」への作品制作を依頼され、1928（昭和３）年には《広島大本営御親裁図》を明治神宮聖徳絵画館に、従軍を志願する前年の1937（昭和12）年には《宮古海戦図》を海軍館に納めるなど、官展での活躍と評価を基盤に、国の体勢と関わるところで制作活動を行ってきた。中国へ従軍するという決断は、画家生活の上で特に違和感の無い選択だったと考えられるとともに、美術界全体の時流に合致したものでもあった。1937（昭和12）年には、日中戦争の勃発に呼応して、献納画展等が各地で開催されるようになった。陸海軍への従軍を志願する美術家は増加の一途をたどり、戦地に取材した作品も数多く発表されていく。南より一足早く中国中・南部に渡った洋画家に藤島武二がいるが、従軍日記にみえる藤島に関する記述[6]からは、南が藤島の旅行談を聞いたことが想定されるし、従軍を決意する一つの契機となった可能性すら考えられるかも知れない[7]。南が55歳で経験した従軍は、時には体調を崩すような多忙な行程のうちに行われた。しかし滞在は予定より延長され[8]、上海や南京などの大都市から、時には前戦にほど近い場所に立ちつつ各地で精力的に制作している。従軍画家としての意識が感じられる一方で、戦争の痕跡生々しい情景を目にしつつも、自然の美や人々の生活環境に対する印象が多く記されているところに、風景画家である南の特性が表れているように思う。

従軍後の南は、東京の自宅に戻った翌日に陸軍省への帰朝挨拶をすませ[9]、早速に中国で画題を得た作品に着手[10]。この作品は、同年の聖戦美術展[11]に出品された《戦跡星子》と考えられる[12]。用務の一つであった絵葉書用の素材は、同年末に陸軍省に提出しているが[13]、図版等の詳細は不明である。

本稿では紙幅の都合により、中国での制作活動や周辺状況を示す記述を中心に、一部概要を含めて日記を紹介する。晩年の南の画業が明らかになるとともに、交通や宿泊施設、現地に住む中国や日本

の人々の生活についての記述をとおし、従軍画家を取り巻く物理的条件を知ることもできる。同時に、従軍画家が戦地でどのように見なされ、対応されたのかといった待遇面も浮かび上がり、『従軍日記』は、戦中を生きた画家の生活の一端を知る上で非常に貴重な資料として位置づけられると考える。

なお、原文には今日では不適切な表現等があるが、当時の時代背景のもとに記されたものであり、資料性に鑑み、原文のまま掲載することとした。

①4/3 上海
②4/7 蘇州
③4/11 上海
④4/13 杭州
⑤4/19 上海
⑥4/20 南京
⑦4/28 九江
⑧4/30 星子
⑨5/4 九江
⑩5/5 廬山
⑪5/6 九江
⑫5/9 南京
⑬5/11 上海

中国旅行の滞在地・到着日

【註】

1　1939(昭和14)年7月17日付の南薫造日記（以後、脚注において参照した日記は、同年の南薫造日記をさすものとする）には、「支那従軍日記の整理漸やく終る」とあり、この頃完成したと考えられる。

2　「朝、陸軍省恤兵部川上中佐に面会。本月廿一日宇品より御用船に投乗従軍する事に決せる由を聞く」（3月20日付日記）

3　「朝、陸軍省より電話。（中略）川上中佐に會ふ。恰度小林万吾氏も来らる。手当金（一千円）を受け、二階にて辞令を受く」（3月28日付日記）

4　松林・雨田の作品は、同年の聖戦美術展に出品されている。「聖戦展に松林雨田両君の作品陳列されたと聞いて見ニ行く。中々佳作である」（7月21日付日記）。雨田は後に除隊となり東京美術学校に復学、南教室に入っている（10月31日付日記）。

5　「従軍寫生」は、表紙に「揚子江遡行（日龍丸）　九江鄱陽湖 星子」とあり、船上から見た風景などが、「支那格子」は、南京の煉瓦の格子や夫子廟の欄間、蘇州の瓦の格子や九江の煉瓦塀の窓など、各種格子デザインの写しがある。

6　4月13日付・従軍日記

7　藤島は、老体を押した自らの従軍が、若い者の精神的鼓舞になるとして、従軍中、軍に評価されたこと、また藤島の従軍に続こうとする人が「続々と出て来た事は事実」だったと述べている（藤島武二「中支戦線雑感」『塔影』第14巻第7号）。

8　5月4日付・従軍日記

9　5月23日付日記

10　「星子風景を＃60に初む」（5月28日付日記）

11　7月6日－7月23日。東京府美術館

12　7月4日付日記に「昨夜磯谷より額縁到着。＃60を入れる」、翌日の日記に「聖戦美術展へ戦跡星子を出品」とある。帰国後の日記には他に60号の作品の記述がないことから、5月28日に制作を開始した作品を聖戦美術展に出品したと考えられる。

13　「陸軍省恤兵部に川上中佐を訪ひ絵端書用としてスケッチ四枚色紙二枚を提出（中略）色紙は川上氏へ呈する」（12月26日付日記）

『従軍日記』

本文中の□は判読不能の文字を、□内の文字は、判読の可能性のある文字を示す。「／」は原文の改行を表す。句読点は原文によったが、内容の理解を助けるために区切りを意図する空白を加えた。一部に誤字・脱字も含まれるが、明らかな誤字を除き原則として原文のまま掲載した。日記内容の要約には、■を付した。

中支那従軍日記　自　昭和十四年三月廿九日／至　仝五月廿一日／昨年中陸軍省側よ里帝展文展審査委員級以上／の洋画家に對して支那に於ける我軍戦跡の寫生／旅行出張を非公式に希望あり。由って小生も従／軍を願出でし處　当方希望通り此度従軍出張／の事に決せ里。仝行は小林萬吾氏と仝氏／の助手として美術学校卒業生鈴木貞三君との／三人也。因みに豫ねて陸軍省嘱託として／上海に出張し製作せし数名の洋画家[1]とは／異なる資格□て、別に定められたる画題の製作／の義務も無く全く自由の行動□て單に戦跡／を視察し置けば宜ろしとの至って都合好き條／件の元に従軍するを得たり。只だ今日迄出張せる／数名の人に依りて自発的に作られたる先例に従／□土産を提供する約束をなせ里。即ち支那／旅行中に穫たる画題によ里六十号画布に一画を／作りて陸軍省に寄贈する事。絵葉書作製の／為め其の材料を一時貸與する事の二つ也。但／し助手は絵葉書製作の絵画一組を提出寄／贈する事也。／猶ほ内地を離れて後ちの交通費、旅舎費／用等は一切陸軍省支辨の事、猶又た製作等／に費用として金壱千円を給さる。（助手は二百／円）／資格　陸軍省嘱託、（軍属）将官待遇／助手は尉官待遇／

■以後、３月29日の東京出発の記述が続く。旅程や宿泊先は前述のため割愛する。制作に関しては「油絵を初めた」との記述が４月２日にあるが、画題や寸法等、詳細は不明である。以下は、上海に上陸した４月３日以降の日記である。

三日　半晴。寒冷／朝、海の色が濁って来る。八時頃か船は／揚子江に入った由を鈴木君が来て告げる。淡／水に変った故か動揺は急劇になって心持甚／だ宜ろしからず。下の兵隊等も参って居る者が／相当な数だと云ふ。一時間も経て浪が小さく／なり水の色が一層濁って来た頃、もう大丈夫と／寝台を下りて服を着ける。朝食は中止して珈琲／のみを採る。遅く洗面に行ったら川添氏[2]も／恰度やって来て、昨夜はすっかりやられて今迄／床に居たとの話であった。昨夜催された兵／隊の演藝会も半数の船暈者出来の為め全力／を盡し得なかったそうである。／甲板に出る。ヂャンクが一隻半帆で行過ぎ／る。左方遥かに低い陸が見へる。／ジャンクの数が三つ四つと増す。沈んだ汽船の帆柱／が見える。室ニ入って頼まれた画帖（機関長）と／色紙（賄長[3]）を画く。両岸が接して呉淞にかゝる。／戦ひに破壊された建物が初めて目に入る。右岸にも／亦た左岸にも。大きな煉瓦煙突の中央に大砲で明／けられた穴を残して其儘立って居るのが見へる。直ぐ／傍の鉄道桟橋に我が病院船吉野丸は身を／寄せた。十二時少し前。／此處で計らずも中支那片村部隊本部（運輸／部）の斎藤肇と云ふ大佐の出迎かえに會って、乗船／者の誰よりも早やく下船して其自動車で三人本部／に行く事となった。斉藤氏は吾々が宇品の係り／の間違ひの儘で乗船して此所迄来た事[4]を非常／に恐縮がり、吉野丸船上

でも何か一言あった／らしく想像出来た。従って衆目の間を大佐に導／かれて下船上陸する事は甚だ晴れの出来事であった／らしい。／斎藤大佐は広島の人で小生と仝中学出身とかで／広島辨を此人から聞く事は此場合中々なつかし／かった。車中から江湾鎮競馬場、維新政府市廠、／博物館、図書館、学院、音楽学校、競技／場等の戦跡を説明され、日本租界を廻／って昭和島の片村部隊本部に入った。／片村部隊長 其他の人ニ会ふ。／部隊長、陸軍少将 片村四八氏。／（広島縣高田郡出身）／船舶輸送司令部参謀／中支碇泊場監部／陸軍輜重兵大佐／物部長鉾氏／陸軍　大佐　斎藤肇氏（広島縣人）／種々談話の後小林氏と共に二三枚づゝ唐紙半折／（小林）色紙（小生）に畧画を画く。／再び送られて宿舎アスターハウスホテルに入る。／上海黄浦路17。Astor house hotel. ／室はバス付の大室なり。宇品乗船以来稍々／不安の感が生じて居たが之れですっかり軌道／に乗って来たと皆で悦こぶ。／夕食後鈴木君と附近散歩。五時頃東京／自宅へ電報を打つ。／

四日 快晴／充分では無かったが相当に眠れた様であった。／六時起床。室から見た町の建物を八ツ切／の水彩に画く。斎藤氏から電話があって之れから兵／站部へ同道案内するとの事。朝食が遅れて居る處／へ斎藤大佐来着。直ちに行かうとの話で三人其儘／出かける。兵站部司令官渡辺大佐に面会。今／後の事に就きて談合。自動車も出来るだけ用立／てるとの話であった。吉野丸機関長からの紹／介による弘中中佐にも会ふ。尚ほ又た美術学校／油絵科豫科で應召せる雨田一等兵にも会ふ。／上海渡辺兵站部司令官／歩兵大佐 渡辺直知殿（山口縣人）／渡辺兵站司令部 歩兵中佐　弘中勝氏／仝少佐　岩松正人氏／仝　雨田一等兵／司令部を出て斎藤氏の案内で敷島園に行く。此の／庭は上海の煙草商の未亡人某の所有であったが／一時支那兵の陣地となって日本軍に占領され、／兵站部の手に由って復旧し（但し立派な建／物の一二は破壊された儘であるが）敷島／庭と名つけ兵士の為めに遊園とされしもので／珍らしく日本よ里移植せる桜花が七部咲きと／云ふ處で、兵隊等は酒瓶を携へ来て草上／で宴を張って浮かれて居る。吉野丸の看護婦の／一隊が川添軍医、船長等に引率されて来て居／るのに會った。吾等は簡單な食事を採った。給／仕の支那娘をスケッチする。再び斎藤大佐に導／かれて大場鎮の戦跡を訪ひ、新らたに建て／られた表忠碑（松井石根大将の文字）を／仰ぎ、此の小丘から戦争当時を忍んだ。今は／緑の麦畑の間に菜種の花が美しい。其時恰／度、飛行場から黒烟の上るのを見る。ガソリンの／燃ゆる煙らしい。其れは火事であったが二十分の後に／は止んだ。黒烟と其れに向って馳せつける兵隊／をスケッチブックに記したのは所柄印象が深／かった。此所にはトーチカも其儘保存されて居る。／之れから悪道路を過ぎて 前度の上海事変の／爆彈三勇士の戦死の跡を訪ふ。碑が建てら／れ鉄條網やトーチカも其時の形で残されて／ある。此碑は此の附近に建てられた支那側の／記念碑を壊して其の材を以て建てられたのであ／ると云ふ。戦死者の簡單な墓標が五間、／十間於き位に立って居るのを見て心から拝した。／此辺では子供が多勢来て、先生／シーサン／オカネ進上／アリガト、ホレシと声を合せて歌ふが如く／乞ふ。三四人にはやったが後から後から増すので皆／にはとても廻り切らない。四時前寄宿。食堂で／共に茶菓を喫し斎藤氏と別かれる。鈴木君と／共に後刻ホテルの直ぐ近かくの領事館と警察署／（数日前、焼かれて惨たんたる光景を呈して居た）の／間の川ふちに出かけて油絵＃４を画き六時帰る。／夕食後雨田君来宿して明日の行動の

連絡を／とる。其自動車に乗って絵具屋龍華堂に行く。／小林氏はカーキ服用のカラーを探がす。賑やかな／町を散歩。喫茶店で自動車を待合せて宿に帰り／雨田君は兵站部へ帰る。今日は中々多くの場所／を歩るいた。／

■５日の早朝は、ホテル前の蘇州川のそばで舟や汽船の往来を眺めた。以後は同日の日記の続きである。

七時朝食。九時前片村部隊よ里自動車が来／る。（昨夜兵站部の雨田君が態々連絡を取□／来て呉れたのを、こちらの不注意と云ふか何の考ふる事／も無く、しかも雨田君が何か□の為め来れなかって／自動車のみ来たのであらうと考へて直ちに此の自動／車に乗った。）江湾鎮の競馬場に行き其の附／近で画く事にする。＃８に高い塔と前の壊れた／家を画く。小林氏も鈴木君も近かくで初める。／其所へ渡辺兵站の自動車で雨田君が来、初めて／吾々の考へ違ひに氣が付いた。十二時半終って／二台の自動車に分乗して敷島庭に行き／簡單な昼食とビールを飲む。吾々三人と兵隊三人仝じ卓で。／桜は殆んど満開。今日はまた多数の兵隊が来て野／天の食卓も満員。酔拂ひの兵も見受ける。雨田君の／案内で午后は江湾鎮の町迄行って見る。小舟を入れ／るクリークに沿ふ町で非常に面白ろい。町には市／が立ち群衆で一パイである。人家、白壁等実に／宜い。中々□まって居て何個でも大作が出来相に見／受けられる。柳は新菜、菜種の花咲き、草の緑／も鮮かで点景人物も好適である。二枚併べ／た石橋（初めは三枚四枚のものと思はれたが今は／欠損して居る）を渡って小舟に栗に似た野菜／を洗ふのを見下ろし遠くに白壁、緑に塗った／家等を眺めて＃８を画く。町の裏には戦争で／壊れた家も見へるが本通りは九割方残って居る。／近かくの一軒は所謂慰安所となって居て兵隊の／出入するのが見られた。絵の終った時雨田君が其／の内部に案内して呉れて瞥見した。帰途は海／軍戦跡八字橋を見、又た家屋の残骸最／も多く、惨憺たる姿の閘北（ザホク）を通って／帰宿。夕食はホテル二階の支那料理を試みたが／甚だ不味で之れなら東京のものの方が上位だ／と考へた。／食後 鈴木君と絵具屋迄行って帰る。鈴木君は田代君と／再び外出した。／

六日　晴　寒。風あ里／七時前起床。電話があって直ちに斎藤大佐来宿。／要件は片村少将が一夕晩餐を差上げ度いから／来る十六七日頃一日明けて置いて呉れとの事であっ／た。／九時過ぎ雨田君自動車で迎かえに来る。（今／日は兵站部の自動車が□たので他部の自動／車を頼んだと云ふ）南市に出懸ける豫定であ／る。之れに行く前 小林氏は田代君の絵を見る／為めに仝君の家に廻る。小生は車中ニ在って／家外に待つ。相当長時間であった。蘇州河／の向ふ側、即ち元英租界では頻々とテロ事件／が有って余り安全とは曰はれぬので其所ニ行く／事を控かえて居たが今日は其れが順路な／ので、初めてガーデンブリッヂを通過して租界バンドを通／る。実に非常なる群衆である。英国桟橋附近は殊に／荷物の上げ下ろしに雑沓を極めて居る。赤塗の大／バスも此租界のみに見られるものである。暫らく行って／佛蘭西租界の境界よ里（或は一寸其内を通過／するのかも知れない）日本軍の警備せる南市に入る。／無人の街□を□里、幾ヶ所もトーチカ、バリゲート／で道路を狭めたる警備兵の歩哨の前を通り、幾／ヶ所でも訊き乍ら兵站部病院にたど里着いた。／尨大なるオレンヂ色

の支那宮殿形の此病院は／野の中に太陽の光を浴びて立って居る。之れは／新築間も無いもので病院として建てられて未だ使／用して居なかったのを日軍の占領と仝時に陸／軍病院としたものである由である。雨田君が頼ん／で呉れて吉村少尉が案内して下さる事となっ／た。此病院は一時五千人を収容した時もあっ／たが今は三千人の患者が居ると云ふ事である。／陸軍輜重兵少尉吉村直蔵氏／渡辺直知部隊太田部隊／（大阪市住吉区旭町二丁目一〇〇、電話、□、１６９２）／仝氏は甚だ物和らかな上品な人である。多分／一年志願兵出身であらう。令兄は大阪美術館の／部長か或は理事かを務めて居らるゝ由。／病院のバルコニーに上って四方を眺める。仏蘭西租界は極く／目近かでバリゲードや仏蘭旗も近かく見へ、又た整然／たる併木は巴里の一部を見る様にも思はれる。眼を／反對の側に移すと遥かに黄浦江の河面が光里、又た／古寺龍華寺の塔も見える。／龍華寺に案内される。其塔は荒れては居るが美しい。／内側の白壁は落書の文字が一面に書かれて居る。兵隊の／名前である。此所で吉村少尉から聞いたのであるが／落書をするのは日本人に限り支那人は決して此の慣習／が無い。之れは文字と云ふものを非重に尊ぶからで／あると云ふ事である。見下ろすと村も甚だ美しい。／道路を距てゝ龍華寺の伽藍が物淋しく立／ち併ぶ。其盛時を思ひやらるゝ。鈴木君は夢の世界の／様だと度々繰返して嘆称する。実際白日の夢と云ふ／感がする。一寸奈良附近を想ひ起こさせるが 其れ／よ里も荒廃して居る。幾棟かの建物も半壊である。／佛像は何れも餘り立派なものでは無い。建築よりも／遥かに劣る。或時代に新らしいものと取換へられたものか／其れとも当初から此の佛像であったのか知らないが、其／の渡金の色もイヤに安ッぽい。本堂の佛像の天／蓋が壊れて居る。番僧の説明に依れば飛行／機の爆彈によるものだと云ふ。天蓋は斯く／壊れて居るが其眞下の本尊は少しも損せず、／爆彈は斜め前の敷石に落ちたと指す。此寺の境／内でゆっくり寫生したら定めし面白いものが出来るであらう／と考へられる。此儘直ぐ去るのは如何にも惜しい心／地がする。／此寺は禪寺で相当に由緒あるものだとの事で／ある。然し日本の禪寺程宗教的にしっくり／しない。此寺の和尚が人の所望で半切に字を／書いて呉れるさうで大きな円硯に墨をすって／居る男が居て其文字を見せて呉れたが支那／人としては餘り上手とも思はれない、と云ふよりも／甚だ日本人の書く文字に似て居るので頼む事／もしなかった。今は此謝禮金で寺を維持して／居るのだとか。／寺を出て淋しい町に只だ一軒開業して居る／粗末な日本の料理屋（兵隊を相手）で丼飯／を食って黄浦江の水際に行って水面を／眺める。此辺へ来ると船も殆んど上下しな／い。柳の小木の雑然と生へて居る間に／水際に近かくトーチカが幾個も残って居る。／上流の湾曲した岸の向ふに青く龍華寺の／塔が見える。／之れから柳川部隊の手によって破壊／された南市の廃墟を通過し、今日では／城壁が取り除かれ只だ門のみ残る古の城内に入る。此所も暫らく／は破壊の跡が続くが次第に古い家の併／びが古色蒼然と立ち盡し、住民の影も／無い。此の人影の無い町が中々続く。ポツく／人影が見へ出し、次第に其数を増す。吾々の／自動車は狭まい町を通って警備隊本部／に着いた。此所の前では通行者は皆な寫真／入りの通行証を示し、維新政府の巡査は／一人一人通行者の身体に障って驗査をして／通過を許す。中々厳重である。日本兵も無論／銃剣で番をして居る。通行者は帽子を取っ／て頭を下げる。吾々にも仝様にする。／司令部から此辺の事に詳しい少尉の人が来／て案内してもらう。町は次第に賑やかに／なり湖心亭に来た。私は嘗て欧州へ行っ／た時即ち明治四十年七月と大正四年十二月／印度への

途次の二回此地に来て此の湖心／亭を見物ニ来た。当時の雑沓は言語に／絶したものであったが今まは比ぶ可くも無い有様／で全く今昔の感に堪えない。池の周囲を／取り巻く料理屋等も皆な戸を閉めて居る。そ／れでも湖心亭の内には多勢の老人等が／机にもたれて茶を飲んで居た。

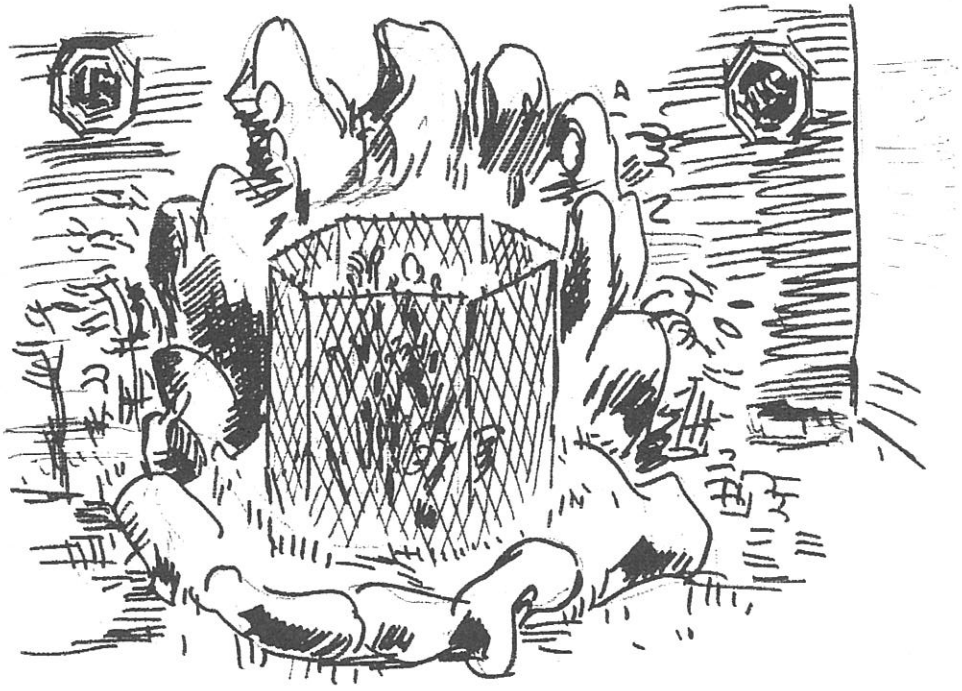
■この後、町の市場を見て帰宿。ホテルの部屋が変わり、「愈々将官待遇が事実になって現はれて来た」と感じる、最上等の室になった。

四月七日　晴。中温。／昨夜は能く眠った。六時半起床。／食前町に出て綱を買ひマーケットをのぞく。朝／夙くより中々の活氣である。／十時五十分の急行で蘇州に出発する事となっ／て居る。準備して一個の荷物をホテルに預ける。／雨田君が迎かへに来て呉れる。雨田君は我々の係／として命令を受けて仝じ列車で出発するの／であるが、此他に美術学校師範科出身／の松林義英君（旧姓日野、広島縣蘆品／郡、府中。渡辺兵站付軍曹）も命令に依って仝行する事に／なったと云って来る。中々有勢な一行となって愉快であ／る。聞けば松林君は数年前 広島ニ於ける小生個展[5]／開会の節 島薫[6]君の紹介で面会したさうである。まるで／忘れて居た。吾等三人は二等車に乗った 甚だ混／雑して居たが軍の手配で席も充分取ってもらった。／三等車の方は立った儘の人々で込んでゐる。停車場司令／官も車中に来て一寸挨拶。仝車には戦線に出発する／士官も在って国防婦人会の数名が見送って居る。／列車は残骸の家屋の群を見捨てゝ野に□り出る。／麦の緑と菜種の花の黄の間を走り、ミレの画く農夫／男女の点々せるを眺め、青空を映すクリークの数々、／其れに架けられた小橋、桃花咲く美しい小部落を／過ぎる。非常な明るさ。壊された小停車場を／過ぎて崑山に停車。新聞で能く見た地点である。／鈴木君は此地の戦で其の同級生を失ったと云ふ。小／山（即ち崑山）が右手十町位の所に見へ 破壊された／塔が其の頂に見へる。既に修復に取り懸って居／るのでは無いかと遠くから眺められた。／鉄道の両側には漸やく水が多くなり蘇州／の近かつくのを思ふ。右手に広い湖水を見る。／陽域湖である。遥かに青く塔が見へ、間も／無く列車は蘇州の停車場に入る。／

■この日は蘇州で虎邱山や寒山寺をめぐるが特に制作の記述はない。宿泊先は鉄香路繁□家旅館である。

八日。晴。暖／六時半起床。雀の声が聞えたと思ったら／直ぐ後から昨日寒山寺で切りに鳴いて居た頭の／白ろい、其中央に黒のブチのある雀よ里稍々大きい／鳥が庭で鳴き出した。起き出て宿の左の／狭まい町を通って河ふちの町に出る。場末／であるが物賣りが声張上げて通る。湯を／買ふ為めに薬鑵を持った女の子供も多数見／かける。左に曲って行くと古い石橋がある。／地図の上で見ると上津橋とあるのに相当するもの／らしい。橋の積石の間から灌木が生へて居た里、／かづらが垂れて居たりする。欄かんの一部も／壊れて居る。多分多くの画家に画かれた橋で／あらうと想はる。橋の前後から、また両岸／から眺めたが中々好い。明日は之れを画き／度いと思ふ。／朝食を済ました處へ松林、雨田両君／が迎かへに来る。雨田君も今日は銃を捨てゝ／繪の道具を持って居る。松林君は八号画布／を二枚併せて持って来て居る。純然たる／画家部隊の態である。人力車を五／台列らねて

城内に入里（□門か）門際／で女巡査が通行の婦人の身体を調べて／居るのを見る。町には朝市が立って居て／非常な雑沓である。其の間を抜け狭まい露／路の様な通りを漸やく人力車が通り抜けつ／丶獅々園に行く。之れも例の石庭／であるが建物は留園よりも上等の様に／見えた。廊下の手摺、窓等中々面白い／装飾がある。所々に設けられた小庭が／殊に好ましいものである。牡丹を中庭／の中央、一段石を積み上げた上に／二三株植え、其れだけを小竹の垣根で取巻い／たのが中々凝った面白い物に見えた。此の／遣り方は全く初めて見る處である。／



牡丹はまだ赤い新芽であったが此の竹／垣を透して見る盛の頃は定めし美しい／ものであらう。寫真を撮った里、スケッチ／したりして一時間位居て出る。再遊／寫生の機が望ましい。／（獅々園の名は、園内の小庭に獅々に似た／石が配置されて居るので起こったと説明され／其の石も見た。然し之れが事実であるか、此配石が／後に造られたものか不詳である。）／獅子園を出て待たして居た人力車（ワンポツ）に／乗って浅草の様に賑はう寺の横を通って／城内目抜きの漢人街？を通り抜けて南に／向ひ、色々曲折して可園の前に出で又／た三元坊、府学宮の長い土塀に添って／門のみ残る規模広大な宮殿の跡の／前を通り、畑中にポツンと残る六重塔／を仰ぎ見る。此塔は甚だ荒廃して、かさゝぎ／や諸鳥の巣となって、鳴声が賑やかである。／□門（？）と云ふ城壁の南西の角の門を潜里／呉門橋に出る。新らしい橋の様に見へる。／此橋から城門と其横に這入込む／小川の具合は中々美事でドッシリと大きく／強い眺めである。橋を潜る船の往来は／甚だ頻繁である。此所でも往復の舟を／厳重に調べて居る。色々な舟がある様で／あるが或物は相当遠方から来て居るらしく／見へる。又た此の雑然たる河面を悠々と大きな／投網を投げ乍ら下る漁夫の舟もある。／女房が艫を漕いで居る。河幅には不似合の乗合の発動船／が一時間於き位には／来る。コバルト色に船体を塗り、黒塗の網代の／蔽ひをした中形の舟は小ギレイな若者が四人／で艫を漕ぎ、他の舟よ里も遥かに速い舟足／

で進んで行ったのは甚だ颯爽たるもので此河／のヨットとも曰ふ可き感がした。富豪の持舟／でもあらうか。／河向ふに海軍の溜所がある。吾々は持／って来た辨当を食べる為めに這入って行ったら／甚だ親切に取扱はれ、豚汁、かま鉾等を振／舞はれた。／橋の南の側の岸辺で八ツ切の水彩を二枚画／いた。河に沿ふ人家が甚だ引付けた。楊／柳は出たばかりの新芽をボーッとさせて居る。／小林氏、松林君、鈴木君は油絵、私と雨田／君は水彩を画いた。四時近かい頃一同／繪を終って橋のたもとでワンポツを雇った。／雇ったと云ふよりも彼等は喧嘩する如き有／様で吾等を奪ひ合ひ、客が座席に腰を下ろす／と安心□、客に有り着けなかった者は吐鳴り／続けて居る。実に一生懸命である。宿迄は／一里半位もあるか知れない、が一台二十五／銭で満足した様子であった。（往路は／五十銭づゝやったが中々文句を云って／五月蠅さかったが其附近の警備の兵隊や巡査迄／出て来て其儘で済ました。然し兎角く安い／俥賃である。帰途車上にて下痢性腹痛／を感ず。心配したが大した事にもならず済む／様である。／夜　松林、雨田両君散歩に誘ひに来たが／腹を用心して外出を見合はす。鈴木君は仝道。／宿　今夜は相当に客多し、中尉位の若い軍人／が多い様である。／

四月九日。曇。和。／朝夙く目醒めたが体を用心して再び／寝る。八時半起床。此旅行中最朝寝／也。薬がよくきいたか腹具合はさしたる事／も無ささうである。今日は別々の行動をとる。／小生は昨日見て置いた橋を画く準備を／する。松林君も此橋を何處からか画くと／云ふ。小林、鈴木雨田の三君は寒山寺／に向ふ。私は午前中画いて十一時半頃帰／宿する。それは昨日停車場司令部よ／り電話があって『陸軍省兵務局課／員、歩兵中佐　友森清晴と云ふ人が九日午后一／時五十分杭州よ里南京に行く途中面会し度き／故　蘇州停車場迄出て呉れとの事で上海渡／辺兵站部から停車場司令部に電話があったから／傳へる』との事で其れが誰なるか一向知る處／は無いが我々一行の為めに用事があるか其れとも／私一個人に對してかと考へ乍ら松林君と共に停／車場ニ出向いて杭州から来る列車を待った。／列車と云っても機関車に只だ一個の客車を／連結したもので乗客は全部兵員であった。／下車した友森中佐と云ふのに會って見ると、話／が甚だ間違って居た事が分かった。仝氏の／會ふ可き人と云ふのは多磨美術のミナミ／コウゾウなる人で矢張り現在支那旅行／中であるらしく、飛んだ間違ひであった。想／ふに上海の兵站部の或者が同姓なる為め／直ちに小生と思ひ込んだのであらう。友森／氏は私に對し甚だ氣の毒がって居たが、／実際時間の惜しまるゝ寫生の中途に／於て遠い停車場迄引張り出されたのは／中々の迷惑であった。（其のミナミは南字で／は無い由）。／明日の天氣が気使はれるので今朝画／き初めた＃12の橋図を午后も続けて四時に／帰宿。入浴。まだ日没には間があるので窓／から白い土塀－面白ろい窓のある－と隣家の／屋根を水彩で画く。／夕食後鈴木君と人力車を列ねて城／内漢人街附近の夜景を見物に出かけ、芝／居ニも一寸這入て見る。無論入場料などは／拂はない。見物人の騒々しいのは意想外で／舞台の歌など殆んど聞き取れない（尤も／大分後方の席ニ居たのではあるが）見物人も／其れが当り前か録々舞台を見ないで／お互声高に談笑するもの、横を向いて喫煙／するもの、芝居小舎の係りの者も大声で何か吐鳴／ると云ふ具合である。其れでも／蒸しタオルやガラスコップに茶を運ぶ等支那／芝居らしい處もある。全く桟敷は一種の交際／場の如き觀がある。／帰途鈴木君は小さな靴屋で七円と云ふ／のを六円に筆談で談判して茶革の靴

を買っ／た。見た處一寸立派である。現今東京で／は十二三円する品である。／既に九時半頃になって居て 町も漸やく暗い。／城門迄歩るく。門は〆められ日本人のみ通／行を許す。暗い處に番兵がキラくする銃劔を／横に持ち、吾々が通る為めに少しく開らいた扉の前／に来る。余り今迄に経験しない光景である。勝／利国の人間であると云ふ様な氣持が甚だ／強く感ぜられる。俥に乗って再び城外の賑／やかな燈火の町に来て下車し、之れから徒歩で／帰宿する事ニする。鈴木君とは別かれて宿ニ帰／着。簡單な様な城外の町も案外に複雑／で間違ひ易ひ。交通巡査に筆談で路を／聞き、また間違って日本人の薬屋に這入って／訊ねた。此の薬屋と云ふのは余程以前から／居住して居て此度の戦争で其店を焼き拂は／れた一人であらう。ショーウヰンドーに新潟縣人／某と大書してはり付けてあった。主人は支那服／を着して椅子に座して居た。／宿の横の本通りはま□中々賑はって／居た。／

十日。朝小雨。曇。午后晴。暖／起きて少ししてから小雨が降り出したので／皆で近かくの留園で画く事にする。松林／雨田両君今日は来ず。／留園は去る七日に一寸見たが、其れは／池の周囲だけであったが今日は奥の方を歩るい／て見て、其の複雑せる廊下、多数の室、諸所に／配する小庭等を隅無く見て其の配置の妙に／一驚した。全く迷宮に這入った形である。しか／も荒れるに委す今日の姿は実に凄味を／持って居る。奥には清泉もあ里 又西寄りの／一隅は相当の広さの梅林となって居る。此／場所に行くには土塀の円い入口を通るのであ／るが其扁額には又一村と記されてある。／諸所の白壁の土塀の出入口を潜る毎／にガラリと趣が異って居る處に非常な／妙味がある。最も大きな池の周囲の／石の積み重ねは極く最近に附け加へ／られたもので甚だ俗なものになって了っ／て居るが奥の小庭は恐らく、当初の姿が／多分に遺されて居るのであらうと考へられる。／画架をすへる都合上 大池のほとりに出て画／布十二号に建物の一部と水□を初める。／天氣は回復して太陽も出で、無数／の鳥類の鳴交ふ声が美しい。嘴の黄色／で眞黒なつぐみ種の鳥が最も多く、それ／が大樹の上に幾個も営巣して居る。／台湾のペタコに似た鳥も飛び交ふてキレイ／な声で鳴く（後に此鳥はポーコと呼ばれる事を知／った。ペタコと相通ずるものがある様に思はれた）。庭／石の上には樹上から落す其等の鳥の糞で点々と／白ろく塗られてゐる。池にのぞむ亭の如き建物に／は酒保から出して居る賣店があって支那の青／年男女二人店番をして居る。此若者は非常／に立派な日本語を話す美しい男であった。其／の二階（庭の石の細道で上る様ニなって居て梯／段と云ふものは無い）には近かく喫茶店を／開らかうとして居る長崎人の老人と若者が居て／我々は此二階で持参の辨当を食べた。室／の一隅に新らしい杵が三個と蒸籠が積重／ねてある。餅を造って賣る為めに国元から送らし／たのだと云ふ。遠く離れた異郷での創業で／あるから其の杵には開店の日付を記入して／置いたら宜ろしからうと私は老人に話したが／そんな事にはさして興味も無さうな返事で／あった。／三時過ぎ十二号を終り 仝じ場所で／方向を稍々変へて＃４を始める。相当な見／なりの男の子供が多勢来たので画く為めに／坐って呉れと云ふとドヤくと数人走って／行って思ひくに石に腰を据える。皆な／顔形である。彼等ニは此庭は有料であらう。雨田／君がやって来て今日の五時二十分の汽車で上／海へ帰る様命令を受けたと云ふ。松林君も仝／道との事である。四時頃別かれて往った。／此庭の番人の子供の十才ばかりの女の子供をスケッ／チブックに画く。恥しがりであったが直ぐ馴れる。／咳止ボン

くを一個やったのは自分乍可笑しかった。／後で酒保でビスケットを買ってやる。／夕食後三人で町を散歩。支那映画／を三十分程見る。レミゼラブルから焼き直した様／な条もあったが案外に好い映画であった。／十時帰宿。流石に労かれて足が棒の／様だ。／

四月十一日。曇。暖。／早や起き。荷拵えをして置く。朝食後／水彩の道具を持って本通りの橋から左に／曲って空地の川岸に出て、先日画いた橋／を遠景に對岸の人家を八ツ切に画く。／舟の往来相変らず盛んでワメク女の声も／何時もの通りである。斯の如く一日中／わめき、一年中わめきつゝ、暮るのが彼等の生活／とも思はれる。十時過ぎ小林氏もブラリと／やって来る。一枚水彩画を終った頃 屑／拾ひのボロを着た子供数人が周囲に／来た。彼等は手に竹籠を持って居る他に／ブリキ鑵の古いのをブラ下げて居る。之れ／には巻煙草の吸殻を拾って入れるので／ある。彼等が吾々の附近に集って来る／のは銭を乞ふ目的の事もあるが、吾々／が口にして居る煙草を何時地上に捨て／るかを待って居るのでもある。其の一人、／八才位と見ゆる女の子に五銭銅貨を／供へて暫らく立たせて絵具でスケッチし／た。見た處 此等の子供等は殆んど／笑ふ様な事がない。然し絵を画き終っ／た時 此絵を女の子供に見せたら其れ／でも甚だかすかに口辺に笑が見受／けられたが其れも瞬間で消へ去り、物に／おびえた様な陰鬱な元の顔に返った。／それ等は普通の子供等とは甚だ異なる／陰惨なるものである。／昼食後 馬車で停車場に出で／二時三分の南京から来た列車に乗る。／二等車は半分に区切られ軍人席と／普通客とは別々になって居る。吾等は軍人／席なので甚だゆったりした場席がある。普／通客の方には身分の宜さゝうな支那人の男／女や西洋人が處狭まく乗って居る。乗り／合せて居た支那婦人は盛んに談笑して居た／が 町で聞く女の言葉よりは甚だ上品で／且つ朗らかな様に感ぜられた。無論其の／意味の何たるかは解からないが。／菜の花は眞盛りである。花の黄色／と小麦の緑色とが美しい縞を作って居／る間に溝があり、川がある。とてつも無く大きな／船の帆が其の菜の花の中から生へて動／いて居る。石橋所々、水牛遊ぶ。長閑／ある風光は戦争の後とも考へられない。／二時二十分頃上海に入る。松林君／が停車場迄来て呉れた。アスターハウスに／入り三階のＥ室。／町に出で寫眞屋、絵具屋に寄る。／夕食、入浴。雨になり窓から他を／見るとガーデンブリッヂはキラくと光る。／

十二日。朝雨。午后晴。暖。／相当な雨であったらしい。今朝八時まだ降っ／て居る。／雨田君が九時半頃迎かへに来る。今／朝ハ小林氏持参の紹介状を携へて／皆で特務機関部竹下少将の處に／行く。此所で小生等の資格等に／就いて初めて明瞭に書類としてもらう。／即ち小林、南両人は勅任待遇、鈴／木君は奏任待遇と云ふのである。此所／を出で其儘呉淞ニ向ふ。／豫ねて想像して居た處では呉淞／砲台は白ろいコンクリート作りの城壁風／に露出したものゝ様に考へて居たが実／際は左様で無く、緑の草を以て蔽は／れた堤の如きものである。勿論裏面／は頑丈なコンクリートで固められたもの／である。其床から巨大な砲身が外方／に頭を出して居る。大きなものは／20サンチ程で以前の上海事変／に使はれた儘で修復する間も無か／ったと見へて今度は少しも使用さ／れなかった由である。壊れた儘の／ものが多く、細部の機械等何にも／残って居ない。前面は揚子江の広大な水面で

□／も青く見へる。商船、ジャンクの帆走が美しく／眺めらるゝ。柳の新芽はいかにも和かい。／有名な呉淞クリークは此砲台の／ズット上海よりで白川橋を渡って砲／台には行く。クリークとしては大きな方で／ジャンクや発動船など□泊して居る。／鉄道桟橋方面に引返して此所の／兵站部で昼食を食べさせて／もらう可く雨田君が頼みに行った（今日／は豫定して居なかったので辨当を持参／せざりし為め）。／麦飯、オムレツ、魚の煮付け、広島菜／の漬物の昼食を供さる。突然乍ら／直ちに之れだけの食事が準備されたの／を見て寧ろ以外に感じた。バケツ／形の飯びつを□めて見て珍らしく感じ／た。／食後 所長／渡辺兵站部呉淞支部長／歩兵中佐 新山良一氏／に面会し、後ち、桟橋、建物、其／他の戦跡を案内され乍ら 実地に就いて甚だ／細かく且つ興味津々たる説明を聞き／非常に面白ろく思った。中佐は甚だ穏や／かな人物で話も興味深かいものであった。／其の一つに、／初めて支那の土地を踏んだ日本の／兵隊等はトーチカの語は聞いて／知って居ても其の実物の如何なるもの／かを知らないので、上陸して岸から一二／町進んだ場所に横に長くトタン板の／囲ひ（普通のトタン板よりは厚い）の有る／のにぶつかって、之れがトーチカと云ふ／ものであらうと刀を以て其れを切って穴を／あけ、向ふ側に出て行ったと云ふ。其の／一部が残されて居る。／此所の部隊には東京美術学校日本／画科卒業（出征中に卒業となる。昨年）／の佐藤君と云ふのが居て吾々の為めに色／々世話をして呉れた里 写真を撮った／りして呉れた。／山田部隊及川部隊三ノ四。佐藤正衛。／此の人の父君は現在、阿佐ヶ谷停車場の／駅長を務め中の由。又た其住居は偶然にも／支部長新山中佐と向ひ合せとの事である。淀／橋（橋の附近）の由。／帰途上海で鞄を買ふ。小林氏も買／はれる。何れも十四円は安し。／夕食後ホテルのホールで広島の田／辺二郎氏に会ふ。其の連中二名、主計中佐／数佐喜代蔵氏に会ふ。（二名は藤黒克巳、／平本博衛と云ふ）中佐は中学で小生／よ里二年下（八木直□君と仝級）であったとの／事である。仝氏から杭州兵站部出張／員佐藤軍曹に紹介をもらひ世話を／させよとの事であった。／夜荷作りに更ける。／

■４月13日は、９時30分に上海北停車場を出発し杭州に向かう。以下は、同日の杭州到着後の日記である。

二時三十分過ぎ杭州駅に／着く。停車場の兵站部出張佐藤軍／曹に面会。宿舎等に就き世話ニなる。／歩兵軍曹佐藤正実氏（呉商工会／議所議員、呉市神田町十四丁目九、酒／造業。）／他の團体の人と共にバスで西湖／畔 新々旅館（New hotel）に入る。眺／めの良いバルコニー付の室に這入る。（以前／は支那人経営であったが昨年一月から／長崎人が経営。）／仝時に此宿に入った名古屋市の團／体が軍のトラックで名所を案内して／もらう可く宿を出発する様子なので其の／案内役の伍長に頼んで我々三人も／同乗する。／西湖中を横断する長堤を過ぎ、山間の／路を走って銭塘江に出で破壊された長い／鉄橋のたもとに行き下車。此の對岸にはまだ／敵兵がトーチカ陣地を築いて守って居るので、／少しく橋の途中迄進んだり又は江岸の砂地辺／迄出ると必ず對岸から発砲すると云ふ。能く／眼を据えて見ると對岸の草や畑の中に□じて／人影を見る事が出来る。今も曇った空気の中に／一二の動く人を見る。橋のたもとには歩哨が／立って説明して呉れる。／出来たばかりの長橋（まだ全く仕上げは出来／て居ないが）は支那軍が渡り初めをし、且つ其／れが渡り仕舞ひになったと案内の

伍長君は笑／って曰ふ。鉛筆のスケッチなどして再び／トラックに乗って西湖の堤に戻って□折／し雲林寺に行く。境内岩壁に彫られた／石佛は多数あるが其内甚だ立派なものが／あった。案内役の軍曹は誰に聞いたか法隆／寺の本尊と同形式で同時代のものである／由であると説明した。法隆寺の本尊よりは／穏やかで美しい相であると思はれた。蓮／華に垂れた布の襞は法隆寺の其れと全／く同一である。鍾乳洞があって其内にも羅漢／が彫まれて居るが之れは余り良い作とは思はれ／ぬ。又た寺に近かい岩壁には布袋像が大き／く彫出されて居るが、布袋像は支那の何處で／見ても無氣味に思はれる。数珠、石櫂、／鈴等を賣る子供や男等が大勢吾々を取り／巻いて中々五月蠅くすゝめる。小数珠七本／七十銭で買って甚だ安い物だと思って居たら／吾等が自動車に乗込む頃には一本五銭で／も呉れる様になった。初めは一本三十銭四十銭／と云って居たのに。豫ねて藤島武二[7]氏から／頼まれて居たので一番初めに買ったら、他の／人等も値切るのが面白ろくなったか持ちあぐ／む程買った。／雨が降り出しトラックの上は難儀であっ／た。然しそんな事には一向構はず馳って／丘の間の細道を暫らく奥に進んで清／漣寺と云ふのに行く。寺内の建物と建／物との間に清泉が一パイに湛えて／多数の鯉が□泳して居る。支那で初／めて見る清澄な水で、室が直ぐ此池／に枕んで居るので甚だ面白ろく、変った／ものと見た。此寺は養老院でもある／ので多数の老廃者が居た。／再び寒冷な車上の人となって帰途に就き／町に入って岳王廟に下車。大きな構への／廟である。岳飛の墓は本堂正面から左手／に這入た所にある。本堂本尊は極彩色／の大きな岳飛像である。楼門の下で／は石摺りや地図、土産品等を賣る店が／互に声を挙げて客を呼んで居る。文天□／の忠孝、岳飛の書等の石摺りを買ふ（本／物の石摺りでは無いが一枚十銭程度で／安いと思ふ）。／案内者はまだ他にも行く豫定の様で／あったが雨が降るので之れで終って新々／旅館に帰る。直ちに入浴。／

四月十四日。雨。夕方よ里曇天。中。／起床 バルコニーをのぞけば雨。雨の中／の□の新緑は亦た和かで美しい。／バルコニー欄干も入れて湖中の橋／（断橋）を遠見に水彩で画く。／朝食後五階の窓から領事館の／方面に向って＃12の油絵に着手。鈴／木君も同じ方向を併びの窓から、小林氏／は五階バルコニー円屋根の下から反對の方向／湖面 博覧橋を見下ろして＃30を初める。／此家の五階は大広間でバルコニーも甚だ／広い。支那人経営の時には此所ではダンス／が盛んに行はれて居たと云ふ。今は広間に／は半ば畳が敷かれて宴会場に使用さ／れて居る。／昼めしの後、博覧橋を渡って／島に行き「平湖秋月」の建物に入里／水際の石畳の広場に出る。水は殆／んど此石畳と建物にすれくに湛／へて何かは知らず面白い感じである。水／は四時余り増減が無いとの事である。／建物は古色深かく甚だ画趣がある。／宿に帰って五階の＃12を続く。四時止む。／浴後室前で湖面を水彩スケッチする。／夕食後、鈴木君と岳飛廟迄／散歩。すっかり暗くなって甚だ物騒な／感に捕はる。街燈は勿論、人家にも／殆んど燈火がもれない。全くの暗夜で／ある。敵地が近かいので日没／後の此附近 徒歩は余り好ましく無いと／聞かされて居るので 二人共稍々不安にな／り、右手はポケットに突込み、ピストルを握／るかの如き様を装って歩るく。出会ふ通行人、／巡査等怪しく思はる。新々旅館前迄／歩るき、安心して尚ほ町の方を指して歩る／く。何處かに俥が居るであらう事を当てにして／居たがいくら歩るいても其れに會はない。／領事館下を通り遂に歩哨の居る處迄／来る。暗中よ

り誰何さる。猶ほ歩るく／間に腕車一台を見付け私のみ乗り、□々／□を命じて鈴木君は追ひ乍らついて／来る。漸やく他の俥が有って鈴木君／も乗る。町の賑やかな通りの方へ行く／つもりであったが彼等は心得顔に／湖水に沿って進み 将校集會場迄／引張って行ったには驚いた。我々の服／装を見て早合點したのであらう。番兵に／教へられて町の方に引返す。帰りは十一時／頃になった。俥の苦力に書付けを書いて與へ／歩哨の場所を通してもらう様にして／返す。／夕方から雨は止んだが雲が垂れ／込めて思ひの外暗い。／

十五日（土曜）。曇。小雨。中暖。／朝食後昨日からの＃12を五階の窓で続ける。／半乾きになって居て画き易し。昨日平湖秋月／附近で遇然に寫生中の金井文彦君（従軍／画家として今ま報導部に起居して居る由）に／会ったが今ま訪問さる。／昼食後小林氏と共に腕車で岳王廟／に行く。帰途西冷橋を渡って中山／公園で下車する。外門の赤塗、中門の／緑色と相對して非常に美しと見る。直ぐ／近かい平湖秋月に行き帰宿。直ちに／單独で平湖秋月に引返し、石橋の上／から、二基の大湖石が水中に立ち、其の／周囲をめぐる廊下などを入れて＃12／を初める。此家には二家族ばかり棲ん／で居る様であるが其等の人は何の職業／を持つのか只だブラく遊んで暮らして居る／様に見受けられる。彼等は簡單な釣竿／で魚を釣る。鮒やうぐひの三四寸のものが／能く釣れる。門の下では石摺等を賣る／少年が居るが之れも一緒に釣を垂れて／遊ぶ。小雨降り出す。金井君／も今日は此建物の一隅で画いて居／る。私は絵を終って、前の路ばたで／露店を出して居る婆さんの子供に絵具箱を／持たして雨の中を帰る。景色しっとりと／して柳愈々美し。／

十六日。日曜。曇。小雨。稍々冷。／昨夜は隣室混雑して時々目醒め／稍々不眠。今朝外を眺めると雲／か細雨か、煙って對岸もボンヤリして居る。／霧雨を冒して、鈴木君も一緒に腕ポツ／に乗って平湖秋月に行く。余り非度くも／降らず。昨日からの絵を十二時迄続ける。／今朝は寒むく、咳も出る様なので／タオルをシャツの上に巻き込み、其上に／タオルの寢巻を上衣の上に着、レインコート／で蔽って出かける。之れで寒むさは充分／凌げる。画いて居る直ぐ目の前の廊下／のある一棟には間じきりをして二家族が／棲んで居るが其内の一人の女房が幼女／をしかったり、たゝいたりするのが甚だ氣／になる。□り声で引切無しにしかりつける。／終日、毎日繰り返されて居る事であらう。／笑ひの影の全く消へ失せたお神と子／供の姿である。一方の方の夫婦は今日も其所／で釣などして遊び暮らして居る。／豫め命じて置いた車夫が例の棕□／の蓑を着て迎かえに来たので宿ニ帰る。／昼食後は宿の前から舟を雇って三／人で三潭印月の島に出かける。此島は／一番大きい離れ島であるが上陸して見／ると周囲だけが陸であって内側は全部／水である。そして其水面は湖水面より少し／高い様である。水は澄んで水草が一パイ／生じて居る。廟の前の卍字亭と云ふのを／水彩で画き、又た土塀の円形入口を画／く。黒い土塀（杭州の古い寫眞を見ると建／物の多くは白壁であるが今は多く黒又は／灰色に塗ってある。多分空襲の防備の為め／支那軍が塗る事を命じたのではあるまいか。但／し此の黒色、灰色が案外に面白ろく見られ／るのは不思議である）、に海老茶色の／扉は実に面白ろい配合である。其入口／を透して見た竹林と湖面は之れ又／た目が醒める様にスッキリしたもの

で／あった。

■この日は附近で夕方まで過ごし、舟で帰る。

十七日　月曜　小雨。霧雨。／起き出づれば對岸霞む。／朝食後三四丁の場所にある地蔵寺／と、湖水の一部を＃４に画く。雨盛んに降出／しパレットも画面も雨水に蔽はる。甚だ画／きつらし。地蔵寺も濃き鼠色である。此／所の灰色の壁も案外に美しい結果を来たして／居る。窓わくの茶褐色が甚だよい調和である。／十一時帰宿。／午后、平湖秋月で其建物の前の門、土／塀、往来、湖水を遠くに画く。門前の紅白／の桃花が美しい。桃花は此地に甚だ／多く、湖畔にも楊柳の間、間に植へられて／今が眞盛りである。何れも紅白二色／に咲き分けた八重である。所謂源平／桃と云ふのである。小林氏も後から来て／私の画いた湖水中の大湖石あるものと仝様な／場所から初める。鈴木君も金井君も／仝境内で画いたが、亦た他に池田と／云ふ従軍画家が此所で落会ふ事となっ／た。初對面であるが藤島門下との事／である。絵を終って赤い門の處に／行き赤色の石摺里 竹図四枚もの、壽字／四枚物を買ふ。合計三円／と云ふのを二円にさせた。／今日は終日糠雨が降った。／宮本医院と美術学校師範科へ端書を書く。／平湖秋月の建物に「湖天一碧」の／額がある。／

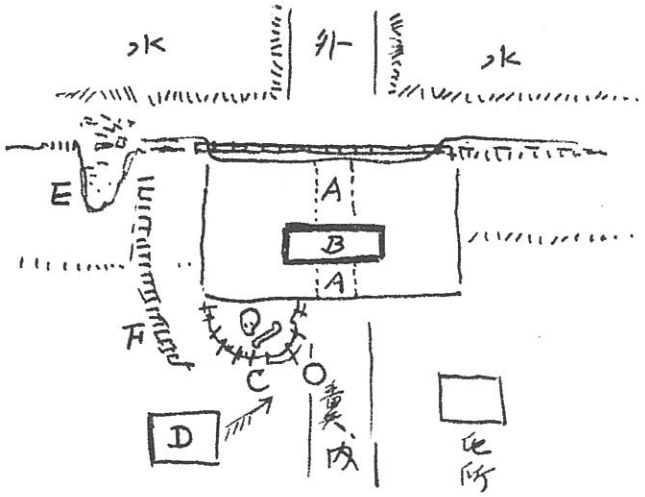
十八日。火。曇。夕方より晴。暖。／朝、鈴木君と腕車で町に出かける。支那人／町を歩るく。例の如く此所にも朝市、食料／品の場所が雑沓。往来に列んで賣って／居るものは筍、野菜、漬物の菜、蜜柑、鯉、／鰻、鮒、ぎぎ、ご里、鱸に似て眼が／口に近かく、皮膚のぬらくした一尺五寸から二尺／位ある魚。（けつと云ふ魚ではあるまいか）すっ／ぽんを縄でゆわえて仰向けにされたもの等／ある。店舗には干魚、塩鮭、ぐちの塩物、／□の塩物等積重ねてある。獣の皮か脂肪／か肉か何んとも知れぬ眞白ろい気味の悪／るいものもある。筍の根の部分を切って捨て／るのを拾ひ歩るく子供の群もある。賣る／者も多いが買ふ者は人道車道一パイである。／其間をイリ豆の如きもの、ネジパンを油で／揚げた如きもの、西瓜の種子、其他種々／なものを籠に入れて擔ひ乍ら賣り歩るく／老人、少年の□小商人も居る。立止っ／て其の取引するのを見るに、至って少額の金高／の様である。恐らく其れ等の物貨は吾々の／考へて居るよりは遥かに安いものであらうと思／はれる。／ガラクタ屋が多い町に来る。其数は中々／多い。以前から商賣して居た店も有らうが、大／半は日本兵が入込んでから初めたので／は無いかと想像出来る。之れは一軒の家／で一方では指物屋の職場があって一方では／ガラクタを併べて居ると云ふ様なのが多い處／から見ると、店の一方の壁ぎわを借りて商品／を併べて居るらしく見へる故である。或る／家で肉　と小皿を求める。合計五十銭。／其所を抜けて本通りの大きな店のある目／抜の場所に白木屋の出張店があったので／這入ったが賣子の姑娘は揃へて居るが商品／はまだ甚だ貧弱である。昼めしを食べ／る適当な場所も見当らぬので支那人店の／二階ニ上ってサイダーを飲み、給仕娘を／水繪でスケッチする。／宿に帰って遅い昼食を済ませて、外／に出る。地蔵寺を右に曲った場所で鈴木／君が病院の入口を画いて居た。其の／絵を立って見て居る子供等の中の十一二才の／女の子供を画かせて呉れと云って見たら應じた／ので直ぐ傍の民家で＃４に

初める。此の女／の子は此附近の子供等よりは遥かに整った／服装をして居里顔も上品で可愛ゆい。名／をスケッチブックに書かせたら郭巧珍と／記るした。礼に十銭札を鈴木君に頼んで／渡してもらったが初めは中々受取らなかっ／た。珍らしく思った。場所を借りた家の／お神にも十銭札を與へた。／宿に帰って居たら鈴木君が宿の／隣家の子供を連れて来たから一緒に画／かぬかとの事でホテルの旧玄関先で水／彩で初めた。十三四才の女の子である。／夜荷造里。まだ画き度い場所／は山程有るが明日は立たなければなら／ぬ。／

■翌19日は上海へ立ち、アスターハウスホテル泊。20日に南京に向かい、宿泊先として兵站部が決定した南京ホテルに入った。

廿一日。曇。午后晴。夜星を見る。／十時頃司令部に行く。小林氏が山田／最高司令官への紹介状持参。司令部は南／京政府の外交部の大建築物に陣取って／居る。中根曹長と云ふ人に會ふ。此人が／吾々の世話役であって、吾々の来支の事も余／程以前から通知があって連絡を取る為め／に上海へ聞合せなどして呉れたとの事で／ある。従軍画家の殆んど総てが此人の／手を経て居る様である。／中支那派遣山田部隊本部／陸軍歩兵曹長 中根吾一氏。／應接室で此人と話して居ると恰度其／所へ恩地孝四郎君が来た。三四日前から／漢口行の御用船を待って居たが今夜出帆／する事となったさうである。／山田中将に會ふ。ニュース映画／や寫眞等で能く覺えて居た人である。甚だ／ハッキリした愛想の好い人で地図を示し乍ら／種々話して呉れた。／司令部で自動車をもらって諸所を／廻る。／先づ玄武湖に出る。杭州の一部分の／様な觀もあるが野趣が多い。遊船が沢山／つながれて客を待って居る。中の島に日本人の／小学生男女が沢山遊んで／居た。今ま六十名程生徒が在るさうである。一／寸見た處でも支那の子供とは全く異なった／感じが直ぐ受取れる。表情が快活で、発／剌として居る。／新しく設けられた自動車道路だと云ふ湖中の／長堤を過ぎて走る。両側の楊柳は甚／だ大きく美しい。右手に延々たる南京の／偉大な城壁を見乍ら對岸に達す。此所／で坂路を登る時雨後の坭の為め吾々の／自動車が滑って片輪を路外に落した。／運轉兵君は堤上を通過する支那人等／を呼ぶ。荷物を下ろしたり、驢馬を止めたり／して二三人の男が来て車を押したが動／かない。鈴木君が「ニイ来々チップ進上」と／吐鳴ったら土手を歩るひて居た男や子供が多勢かけ／下りて車を引張り上げて無事ニ堤上へ押上げた。一／円を年上の男に渡して皆に分けさせた。／紫金山天文台に上る。立派な石造／建築で岩壁の頂上に建てられて居る。所々爆撃／の跡が見へる。望遠鏡中最大の筒は残っ／て居るが之れにも彈痕が幾つもある。レンズ／細部機械は取除かれてある。庭に明時代／の天象儀（二個あるが一個は別名である）が／置かれてある。之れは独逸に一時渡って居た／ものであるらしいが條約に由って支那に戻され／たものである。小林氏は留学中独逸で見た／との話であった。私も或は見たのかも知れないが／ハッキリした記臆は無い。／岩山の一段高い處は朝香宮殿下が／登って居られた處だと記してある。其所は全／く岩石の頂上で十坪位もあるであらうか／凹凸の岩の間に土嚢と小屋が置かれ／てある。小屋の裏側ニ偽物（木製）の高／射砲が二個置かれ数種の色でカムフ／ラージュされてある。支那軍の残留品か／と思ったら我軍の物であるさうな。現／在も役目を果し

つゝある品物である。／小屋の前には観測兵が三名ばかり居て雙眼／鏡を手にして監視して居た。／山麓に大仕掛な防空壕が設けら／れてある。一個師團の兵隊が避難出来る／大きさである由。二三十間中に這入って見る。先／づレールの無いトンネルだと思へば間違ひは／無い。□から□側に諸所枝が出て居る／。明孝陵は仝じ山の麓ニ在る。石／造獅子（座せるもの一對、立てるもの一對）駱駝／二對（仝前）、象二對（仝前）、武人二對／（仝前）、文人二對（仝前）が陵門に／導く。自動車から下車して石人をスケッ／チ又た撮影する。／明孝陵の建物は実に美しい。バ／ランスのとれた穏やかなもので赤い壁は／四囲の新緑と又と無い好ましい調和／をなして居る。奈良の何處かにでも居／るかの様な氣分である。赤い壁の／前に白ろい小米花の様な花が咲／いて居るのが私を引きつける。奥／迄進んで見る。鳥が鳴く。／門を出て中山陵の方へ行ったが／此所では下車せず。公園の如き／ドライブウェーを走って華令塔迄行って引返す。／中山門から南京ニ入って運轉兵に教へられ／て昼食の為め唯だ一軒あると云ふすし屋に入／る。東京すしの看板が目抜きの角の家に出て／居る。内はキタナイが今日の南京ではまだ此／位の處が普通であらう。おでんと／握り壽しを食べる。かじきまぐろ、鰻の握／である。支那に来て初めての生魚であった。／鰻があなごの代用をして居るので之れも初／めてゞある。鰻は此地方に沢山捕れると／見へて南京ホテルでも此魚のフライを食べさせ／た。之れも初めてゞあった。／光華門に行く。飯坂部隊／一番乗りで有名である。城門の内／側の一部に戦争当時其儘を／残された處がある。鉄条網で区／切られてある中には頭蓋骨や、手足骨、／骨盤、まだ半ば皮膚の附着した頭骨／もあって眉毛や閉ぢた眼等が見へる。砲彈、／手榴彈、鉄甲、□□の附着せる皮帯、土嚢の／麻布等が累々と重な里、下には幾個の／死體が重なり合って居るか知れぬ有様で／ある。之等の物の間に菜の花、ペンペン草／の花が交って咲いて居る。せい惨である。漸／やく高まる気温で臭氣も発散する。／城壁に上る。城門の楼廊は跡形／も無くなって居るが上部から中央の明いた／場所がのぞかれる。図の如し。／



A．城門通路／
B．中庭／
C．当時ノ儘／ノ戦跡／
D．支那兵が／機関銃を／以て猛射／せる處、即／ちDの建物内／に銃を据へ／

矢の方向に通路Aの右内側の壁を射て其の彈／丸ハ壁にクッションしてB内に在りし日本兵／の方

向に飛来せしめたるもの也。／外方よ里此城門に向った我軍／の一部（十数名とも二十数名とも云ふ）が／城門に突入した時、後方から来た支那兵／（夜陰の故、敵兵は前に行く日本兵を／仲間の兵と間違へて□来たのが、門／際に来て初めて日本兵なるを知り、後／方よ里日本兵に猛射を浴びせかけた／ので其日本兵は後方と連絡を絶たれ／城門内の中庭に入りて動く事が出来ず／三日に渡って此所に居たと云ふ。其間前／後、及び壁上よ里撃たれて全滅の／非運に遭遇したと云ふ。実に無惨／である。中庭には伊藤中佐の墓標／がある。城門の上部、門前にも／多数の墓標がある。内側も亦た／仝様である。／城門の外部に出てスケッチブックに／スケッチする。苦力が多く門の下の通路／を掘り返して掃除して居る。路面よりは／三尺ばかり高く土で埋まって居り、之れを取／り除いて居る。彈痕でメチャくになった水筒／や、鉄甲や銃丸等が多く掘り出されて／居る。つゝみと兵隊が呼んで居る純支／那町、妓楼等が多い場所を運轉兵／は通って見た。此辺はならず者も多く／武器を携へざる日本人の入るは危険／であるとの事で、巡査も着劔、又は／銃を持って町角に立って居る。／天子廟の前は雑沓で坭棒市／もあり、種々の屋台店もあり、□、／野天の見せ物等もある。一寸下車 坭／棒市を見て歩るく。裏町等を走り、／又た鈴木君の知人の兵隊が入院し／て居ると云ふ病院も訪ねたが既に／後送後であった。帰宿。運轉兵君／も共にホテルで夕食す。今日の自／動車で走った里程は相当長いもの／であった。／夜鈴木君と散歩。小林氏／ホテルの室換へ。／

四月廿二日。晴。稍々暑。／起き出た時 恰度太陽が紫金／山の南方から眞赤に出た處であった／町はもやに青白い。日本時間六時一／寸前であるから内地の五時前の光／景に当たる。／司令部から自動車が来た。明孝／陵迄行く。私は文人の石人[8]二体を＃12／に画く事にした。太陽は中々烈敷射て空／には殆んど雲が無い。鶯、きじが切りに／附近で鳴く。十時頃から二時迄画き／続ける。小林氏は石象を画くと□／って別かれた。繪を終った處へ／二人の少年が薪を天秤棒にぶら下げて／運んで来るので絵具箱を入れた鞄と／画布を別けて持たせて石象の場／所迄行く。少年等は農夫の子供で／あらうがキレイな十三四才の者で髪を長／くして分けて居る。小林氏と二人で／石の駱駝の腹の下に日を避けて／辨当を食べる。鈴木君は司令部へ／行ったがまだ帰って来ない。茶も／湯も得られぬので困った。水筒を／持って来る事に氣がつかなかった。／急に山の辺から雲が湧いて俄雨／がパラくやって来た。荷物を石象／の腹下に仕舞ひ、小林氏は坐象に／私は立象の下で雨を避ける。四／時になって漸やく鈴木君戻って来た。直ちに帰宿。／ホテルでは夜になって食堂の一部に設け／られた假舞台で漫才などが初められた。先／日仝列車に乗込んで居た慰問隊の連中／である。私はま□明るい町を散歩し乍／ら寫眞材料屋を探がす。見当らず、全く／暗くなって商店は一様に戸を閉めて町／は眞暗くなる。表通りにも未だ電燈を／引いてない家が大半である。帰宿して室／に入ると往来の向側に陣取って居る／腕車（ワンチヤ、杭州等ではワンポツと呼ぶ／のが普通である様だ）の苦力等が相／変らずヤーとかヨーとか大声にわめく。／一人のお客らしい者がホテルの入口に現はれ／ると此の声をかけ乍ら自分の俥を数人が／引ぱって来るのである。客が何れかの車に乗／れば其男が仕事に有りつくわけで順番／などはテンから無い。朝の六時から夜の／十二時迄彼等は大声に叫び、客を争／ひ、又た話し合ふのである。／

■23日は、玄武湖に出かけ制作。翌日も引き続き同所で描いている。

四月廿四日。晴。夜雨。気温中。／九時半司令部よ里自働車来る。昨日の続き[9]／を玄武湖畔に画きに行く。鈴木君は今日／は明孝陵へ行く。／風が強く画布をしっかり画架につけ、石／をゆわへ着ける。画いて居る画中に□舫を／前景として入れたいので舟着場所に戻って／色彩の面白さうなのを撰んで二時間一円／の約束で借る事とした。青年の舟人と共に／乗って絵の場所に来て兎角く風に吹きつけら／れさうなのを竹竿で止めて保ち画く。後／ちに小林氏も舟を画き度いとの事で他／の一隻を適当の場所に着けさせる。／画いて居ると一軍人に話しかけられた。此／人は私の誰なるかを豫め當りを着けて／居たと後に話した。其れは広島一中出／身で私よりは五六年後の卒業らしいが、／中支那全体の鉄道の司令官であった。／自分の手帖に畧寫せるスケッチなど示して話し／合った／中支鉄道線区司令官、／岡（鐵）部隊本部　岡鐵之助氏／歩兵大佐。／正午、繋いである船の椅子に腰かけ、／ビールを取寄せて辨当のサンドウヰッチを食べる。／今日の昼飯はゆっくりとした好い氣分である。／一時半繪を画き終り、直ぐ近かくの／公園の一部に在る玄武神を祭る廟に／這入って此所の円形の入口と内部の／空色に塗った建物とを＃４に画く。きつヽ／き切りに庭の木幹をたヽく。廟と云っても／本尊も何も無く荒れて居て、其所には公／園の園丁らしい男が歌を唱い乍ら竹／籠を編んで居る。此男 他の老人と共に／私の後ろに立って画いて居るものが其れ／其れ其所に在る事に気がついて甚だ／興味を感じたらしく話合って居る。／三時過ぎ 小林氏と共に迎かへの／自動車で明孝陵迄遠廻りをして／先程からパラくと降って来た雨を、／先日吾々がしたと同様に石像の下／で避けて居る鈴木君を見出して共に／帰る。／六時頃、今朝湖畔で會った／岡氏が宿に来て呉れる。尚ほ中学時／代同級であった小原君（現在は／野村姓）仝道。小原君は中学卒業後初／めての面会であるから三十七年目位であらう／中支鉄道線区司令部付／陸軍工兵中佐　野村義孝（旧姓小原）／直ちに招かれて夕食の為めに大賀と云ふ／料理屋に仝道、九時帰宿。／

廿五日。晴。中温。／乗船す可き船が着いた事が今朝知れ／たので鈴木君が直ちに手続きの為め出懸／ける。其為め今日の寫生行は中止して／町へ買物に出る。寫眞店、唐物屋、其／他。／午后三時半 自動車が来て□泊所に／出かける。五時乗込と云ふのであるが早／手廻しに行った。澤山の兵隊が既に／到着して桟橋附近で待って居る。五／時前乗船。／船は御用船、日龍丸。純／荷物船で五千頓より少し大きい。別に／客室も無いのでドヤくと船倉／に降りて行く。船倉の中央を／あけて四方を二階に棚が拵えて／ある。中央の空いた場所は天井の荷物の上げ／下ろしする穴で明るいが棚の上下共奥の／方は暗い。電燈がポツリくともって居る。／舷側には一個の窓も無い。上段は立った儘／歩るけるが下段は腰を曲めねばならぬ。／此所は便乗者ばかりの様だ。單独的の／兵隊、例へば二三人一組とか数人の團体的／兵隊で伍長、軍曹、曹長等のみの様ニも見／受けられる。他には新聞記者／の連中等である。鹿児島から来た素人／の藝術慰問團の男女十数人も南京から／乗ったが此場所には居ない。軍隊は千／人以上のものと思はれたが他室に入った。／此の室には百五十か二百位かと思はれる。／私等は其二階の一部に這ひ／上ったが板の上に莫蓙の古いのが敷い／てあるばかりで兎て

も非度いものである。／それよりも其の騒々しさは言語に絶／する。粗末な梯子段をガタくと兵／隊靴で上下するのは引も切らず、／床もガタンゴトンと音の絶へる事は／無い。甲板は鉄張りで其上をガラ／く歩るくのが頭の直き上で響く。／それに兵隊等は何かと吐鳴って居里、流／行歌を合唱する組、帳面を拡げて軍歌／を稽古する連中、ハーモニカを鳴らす兵、蓄／音機を鳴らすのも二組ある。実に耳を／聾するばかりである。中には早や鑵詰を／あけて酒盛を初めて居る落着いたのもある。／手紙らしいものを書く者、花合せをやる者、／実に珍らしい光景である。吾々の周囲／にはゴロく寝轉んで新聞を読む老／兵が多い。子供の頃見た石風呂の／休み座敷を想ひ出すが此所は臭／くて暗いのが違って居る。小林氏の／顔から汗が流れて居るのを見れば／誠に氣の毒である。之れではとても／漢口迄は耐えられさうに無／い。／夕食が来ると云ふ。食器が十人／分バケツの如き四角なブリキの箱で／運ばれ、後から飯、ジャガ芋牛肉／の煮たもの、肴の煮付が運ばれ、之れ／を各自の皿や椀に採って食べる。／此室には毛布の備付けは無いと云／ふから着のみ着のまゝで寝るよ里他は／無かったが隣りの老兵君が毛布を二枚／貸して呉れて之れを小林氏と二人で共／用にして絵具箱を枕に寝る準備した／が相変らずの騒々しさに眠られはせぬ。／其の内に此の船の輸送部隊長／（大尉で名は知らぬが南京ホテルでは／食堂で顔を會はして居た）が来て鈴／木君を呼んで何か話して行ったが／十一時頃になってボーイが復た呼び／に来たので私がついて行ったら、船員／の室を明けるから其れに二人だけ／這入って呉れと云ふ。其室はチーフ／スチューワードの室であった。早速其れに／移る事が出来たのは実に嬉しい／限りであった。／此度の旅行ではこんな事柄に／能く出會ふ。／何と曰ふ静かな室であらうかと思／ふ。／船は今夜は出航せぬ。明／朝だとの事。／

■26～28日は九江に向かう船旅の途次である。蕪湖や安慶、馬當鎮、彭沢などを通過。激戦地であった馬當鎮附近では、「雲でドンヨリした太陽と之れを映ずる水面」に美しさを感じて水彩でスケッチ。28日の昼頃、九江の港に到着。以下は28日の九江上陸後の記述である。

上陸。直ちに岸の上の兵站司令部に行／く。山田最高司令官よ里の紹介状を以て／千田司令官を訪ふたが他出張中で副官の／山本中尉が面會して呉れ、又た司令官代理／の近藤少佐（此人へも紹介状を持参せり）／に會ふ。両者共甚だ懇切に面談され、／長時談話後 桟橋に待つ小林氏も／来着會合。後ち自動車で此所から／余り遠くない宿舎増田屋へ送られた。／其れより前 司令部の應接室で近藤少佐／と談話中 工兵少佐石割平造氏と憲兵／士官が来室、石割氏撮影の廬山／の寫眞を見せられ又た自ら画けるスケッ／チブックを示されたが其のスケッチブックは／極小形のもので六冊よりなり簡單に胸部／のポケットに納められる程度のものであるが／色鉛筆の六色を以て詳細に寫生され、且つ／実尺が記入されてある。画けるものは全く手／当り次第で何でも其画題となって居り、甚／だ正確、明細で且つ興味津々たるも／のであった[10]。充分に見る餘裕が無かったので／若し雨天の日でもあったら詳細に拝見／し度しと云って置いた。／千田兵站司令部員／陸軍騎兵少佐、近藤忠氏／千田兵站部副官、中尉山本一男氏／金沢市東馬場町一八一ノ一〇　tel 2501／中支派遣山田部隊、工兵少佐石割平造氏／（当時ハ岡村部隊ナリシ）杉並区高円寺町三ノ二一八／旅舎　増田屋旅館／旅に入って少

憩の後ち裏の湖水、又た町の／一部を見る。湖水はごみや土砂瓦屑等／を諸所から捨てるに任せて甚だ荒れて居る。／之れに枕む人家も破壊されたものが多く／哀れである。町は空き家へ假りに箱を／置いたり、板を渡したりして店を開いて居る／ものが殆んど総てゞ、うどん、大福餅、鑵／詰、マッチ等の店のみで兵隊相手の飲食店／の極く粗末なものが大半である。矢張り長／崎人を主とする九州人が多い。支那人の居／住はまだ許されて無いそうで、恰度震災／直後の東京の下町の觀がある。／町は土ほこりが一パイで人通りは／八、九割が兵隊である。それも南京其他の滞在／して居た土地とは異なり服装等も甚だよごれ、／鬚ボウくの者も著しく目につき、且つその様子／も甚だ粗暴な外觀を呈し／氣も荒い様子で暗い穢い飲／食店の卓を囲んで騒いで居るのが到る處／で見受けられた。汚れた服装に鉄甲を脊／負ひ銃の外に種々の持物を携へて勞／かれた足取であえぐ様に汗をふき乍ら来／た数百の兵隊を見た。南昌か廬山攻畧の／何れかの第一線から引き上げた兵隊であら／う。相当の年輩の者が多かった。全く前戦に／近かきを思はせる。今朝仝じ船から上陸／した若い兵隊等とは全く異なった外觀で／ある。／宿の食堂には暗い電燈が二個ぶ／ら下って居るが吾々の室は蝋燭である。／しかも蝋燭台も無く、スリーカッスルの空鑵／の蓋に立てゝ机の上に置くのである。室は／ガラくした空家の如き二階で隣室はまだ／半壊の儘で芥が一パイである。破ガラス、／壊れた机椅子、つい立の如きものが埃に／埋まって板の間に放り出されてある。此家は／戦前には支那人の経営する九江一番の料理屋で／あったさうだが此の棟は入口から帳場に行く内／庭の右側にあって此所への入口には相昭の／看板がある處から見ると寫眞屋の寫場や／其他であったらしい。我々の室は壁の表を塗／ったばかりのもので怪しげな急拵への扉を／排して内に入って靴を脱ぎ、直ちに仝じ／高さに敷かれた畳の上に座るのである。一個／の窓は宿の入口の通路に向って開かれて／あるが坐っては高過ぎて外は見へない。服／懸けも帽子懸けの用意も無いから其等のもの／は畳の上に脱ぎ捨てるばかりである。小林／氏の曰はく、蘇州の繁□家よりも一層／満州の宿の趣があると。イヨく戦線に近／かついて来た事が感ぜられる。／

四月廿九日。土。天長節。雨。／昨夜は蒸暑くて安眠が出来なかった。／夜中 天井裏にエラク大きな音がしたり、南京／虫が居さうだとの小林氏の話で稍々不安／な一夜であった。／窓が稍々明るくなる頃目が醒／めた。此町には樹木が少ないので／鳥が少ない様であるが、それでも例の美／声の小鳥が屋根の上で鳴く。之れは／ポーコ（八哥と称するものである。想ふに／台湾のペタコと仝語源ではあるまいか）／朝食を済ませて室に帰った處へ／石割少佐が渡辺と云ふ当番兵を連れて／来訪。昨日私が石割少佐に、雨が／降ったら家に居て石割氏のスケッチブック／を詳細に拝見し度いと云ったので、恰度／雨が降ったので来たとの事であった。小／林氏 鈴木君も之れを見て皆な感服し／た。私は外出が出来ないので昨／日から見当をつけて置いた宿の入口／から帖場の方を向いて内庭を水彩／画で画き初める。十二時頃終る。／石割氏も渡辺君も暫らく後方に立って／観て行った。／昼食後 鈴木君と町に出て、左／方、破壊された鉄橋の間に假橋が／拵へてあるのを渡った。天長節なの／で兵隊も軍属の連中も泥べた／の町を一パイになって歩るいて居る。お／祝ひの酒で誰も非常な元氣で／ある。凹凸の板の假橋を兵隊をよけ乍ら／川向ふに渡る。此辺は多分色町であったらう／かと考

へられる。今も慰安所が数軒置／かれてあるが軍属（多分船の荷物の上げ下ろし／の用務が主たる、以前の軍夫に相当する人々／と思はれる）がドヤく穢ない路をつたって／其家の附近に集まって居た。日本着物の朝／鮮女の姿も見受けられた。直ぐ引返す。橋／の塚のあたりの水面にはエタイの知れない氣／味の悪るい芥が一パイ引懸って居る。ノロ／と呼ばれて居る獣であらう。鹿に似たキレイ／な毛並に蔽はれたものが一匹、まだ死後／間も無いと見られるのも引懸って居る。／宿の近かくの喫茶店に這入る。之れは／九江第一の店構へであったが店内一パイ／の兵隊で其の騒々しさは言語に盡きる。／宿に帰って宿の裏の廊下から／直ぐ眼の前に見へる□湖中の煙／水廟を水彩で画く。夕刻終る。／室が代った。之れは兵站部の係の／人が間違って吾々を尉官待遇として居／たのを今日鈴木君をして訂正させたので／一躍上長官待遇（佐官以上）に戻って来たからで／ある。今度の室は食堂の上で、湖水に／枕む最上等の室で共用の大きなベランダ／がある。洋室で寝台である。暗い乍ら／電燈が點ぜられて居る。前の室ではお／盆の上に茶托無しで茶碗が置かれて／あったが此所では金色の茶托に上／等の茶碗が乗って居里、茶の鑵も添／えられ、火鉢にはアルミニュームの湯湧し／が置いてある。其現金さは失笑を／禁じ得ない。試みに□付された兵／站部指定宿泊所の印刷物を見る／と、／将官佐官　四円　尉官三円五十銭／見習士官　二円五十銭／とある。／食事は食堂で誰れも一様の物を／食するのである。飯は南京米が混／入されてあるのか甚だ硬くボロくして／腹具合甚だ悪るく、料理は全く非／度いものである。此所の主人は以前／から九江に在って久しく宿屋を営業し／て居たとの事であるが其れにしては如何に／もヒドイもので全くの山間の田舎宿の／類である。／渡辺一等兵が石割氏の使ひで、吾々が／明日、星子へ出発するか否かを確めに来る。／明朝出発に決して今日中に必要な手続き／をしてもらう事にする。小雨は終日降って／居たが夜に入って止んだらしい。／廬山は青く見へ、湖面も雲を透かす月／の光で白く見へる。静かである。／

四月卅日。日。晴。／五時半起床。すばらしき朝日である。／ベランダから水彩で廬山を画く。頭部は／太陽が映じて薔薇色を呈し中腹以下／は冴えた円味のあるコバルト色である。山の／襞が多いので刻々に色が変る。前の／野の緑色はまた何たる美しさであらう。／しっとりとした稍々朝霞に包まれた其の／色は近来久しく見得なかったものであ／る。嘗て英国に於て、ウヰンゾー附近[11]で／相遇した色を想起する。／十時に埠頭から出船すると云ふので／其れに出る。船は伊豆附近から来て居る鮪や／かつを漁の和船形の発動船である。日龍丸／仝船した少尉や兵隊も之れに乗込んで居る。／南昌へ行くのださうだ。石割少佐渡辺一／等兵来着。石割氏も我等と行を共にし星子／迄行くとの事で甚だ心強く、嬉しく思った。／石割氏は蒲團の如き荷物迄用意されて居／るので稍々意外であった。太陽は甚だ／強く吾等の上から照り付けた。恰度桟橋／には数名の兵隊が荷揚げの為めに来／て居たが其の内の一人、鼻下に鬚を生やし／稍々青ぶくれのした眼光の鋭い男が在っ／たが吾等の船に對して何か演説口調／で送別の辞らしいものを延べ又たハーモ／ニカを吹いて意氣軒昂の有様であった。／仲間の兵隊は笑って見て居たが吾々の船の／上の兵隊等も只だ笑って、小声で中々うまい／ねなどゝ曰って居る。彼の眼光と云ひ周囲の／人等の態度と云ひ一寸不思議に感じたが／其れは彼の兵は気が多少ふれて居る／のだと分かった。可哀想なものだと語／り合った。船は間も無く桟橋を／離れて、

川下に進んだ。上る時に／見た岩の上の塔や、アメリカ、英吉利の油槽の／ある大建物や、桟橋に釘着された様な英国／の船や（軍艦だとの事である）を右に見て、／二十分も河下に下って鄱陽湖の入口へと右に／曲る。暫らくは揚子江本流よりも稍々狭ま／い河形を進む 両岸とも平坦な土地で／ある。程なく湖口の町が突然岬の向側／ニ現はれる。湖形が複雑な為めに左岸／にある此の町が船の右舷に見へて来るの／で意外である。寫眞等で見て居る石鐘／山は町の左手の突き出た丘で樹木の間に寺の／建物が陰見する。船は桟橋に着く。城／壁で囲まれた町は直ぐ前で正面に近かく／仰震門の白壁が逆行の中に立つ。此の／門は水の多い時季には船で出入する様／になって居るとの事であるが今は□迄全／部現はれ前に砂原もある。屋根の穴は／爆破の跡か。町の背景をなすなだらか／な丘山中央に小塔がある。今ま此所／は海軍が屯して居るので石鐘山上に／も桟橋右手にも海軍旗が上げられて／ある。今日は何かの催し物がある／との事で天幕等が岸の上に見られる。／桟橋附近には発動船が沢山滞泊して居た／吾等は皆な星子行の船に乗り換へた。一時間程／待つ間に辨当を食べる。再出航。水色が／次第に茶褐を減ずる。汀の近かくを進んだり／離れたりする。まるで岸辺を見ると瀬戸内を／航行して居る様だ。暫らくして湖面が広く／なった所に大孤島、（□島、大姑山）／が現はれる。揚子江の小姑島に對照／されるものである。塔や寺等を島の上／や山腹に見る。いかにも支那らしい光景で／ある。石割少佐の手帖から此詩を転寫。／大孤山祠　晁補之／江呑湖巻氣倶豪　山屈起孤峯百仞高／歸爲　買絲□　却應還我所忘刀／（午后二時であった）。／廬山は常に右舷に沿って其の変化／ある山形を仰ぎ見る。五老峯の塊／が左の角に現はれて偉観を呈する。鉛／筆のスケッチをする。山の裾は緑の／野が拡がって楊柳の林や緑草が／鮮やかに水辺に達し、牛が放牧され／てあるなどどうしても欧羅巴、殊／に英国の風景に近かい。／仝乗の兵隊の行李や銃や水筒等が置かれて／ある間に背嚢の鉄甲の間に小さな人形が、くゝ／り着けられて赤い洋服から白い足や手を出して／居る。極く粗製であるが其所に置かれた何／物とも類を異ニするので不思議ニ目ニ／つく。茶褐の物の中の此の人形の、恰／も生がある様に感ぜられるのは誠ニ不／思議に堪へない。寫生し出したら兵隊も／私の手元を覗き込んで、一人は〇〇の／背嚢もイヨく世に出るなと云ひ乍ら／他の兵隊と笑った。／行手□茫、岡山沖の白石島に似た／白と暗緑色の交錯した縞のある山／が幾個も現はれる。二個所に停船、／人家も何も無い汀に兵隊が二人出て／船からの荷物を受取ったが附近の地内／に警備隊が屯して居るのであらう。／四時頃遥かに塔を眺めて／次第に星子の埠頭に近かつく。岸の／上には城門が偉観を呈して立って居／る。威厳のある、又た甚だ画趣に富ん／だ構築である。湖水に突き出て／架せられた石橋を踏んでダラくと／登って城門を潜る。内ニ入れば土地の／起伏甚だ面白ろく、壊された家、壊され／ぬ家、樹木、華表等何とも曰へず美／しい。之れは好い處だと直感した。／此地にはまだ何ニモ店らしいものも見ず／又た住民も這入て居ない。所々に兵隊の／宿舎が取られてある以外は全くの廃□で／ある。（後ちに酒保の物品を賣る二軒の／日本人の店と、朝鮮人がやって居る一軒の／飲食店と、支那人の散髪屋一軒がある事／を知った。）／吾々は兵站部出張所の一室に／寢泊りする事となった。門の内に庭の／あるアーケードを持った西洋館で少／しも壊れた跡はない。入口の直ぐ／左側の一室が吾々三人に当てがわれた／が、之れは多分此所の係りの人等の／室であったらうと思はれる。簡單な木製／の寢台が四個つめて置かれてあった。／薄い毛布が敷かれてわら蒲

団など無い／から体は痛いがそんな場合ではない。／夜は無論蝋燭である。／石割氏は隣家の将校宿泊／所に行かれたが其所ニは寝台も無く板の間に／直かに寝るのであるさうだ。夜具の持参も其の／意味が初めて分かった。吾々も夜具其他／洗面器等持参す可きが本統であった事／を今ま知った。風呂ニ這入る。板囲／ひの急造の場所に桶風呂が据えられて／あった。幾人の兵隊が這入ったのか／甚だ濁って居る。／食事は食堂で兵隊さん等と一緒で／ある。石割氏も仝席。／此所の出張所長は現今は所長代／理として曹長の人が預って居る。／月下散歩。月は十日位。／

五月一日。晴。暑。／小林氏は五老峰を画き度いと云っ／て、鈴木君、石割氏、渡辺一等兵及び護／衛兵二名と共にトラックで八時半出発。／私は此の町の風光を画き度く、且つ先日／来続く下痢をも考へて居残り、町端／れの一番大形の華表を水彩で始め／る。華表は四柱複雑なもので甚／だ緻密な彫刻が施されてあり、全体／のプロポーションを寫し取るにも中々骨が折れ／視力が漸次労かれ行くのが明らかに感／ぜられた。一時半迄画き昼食後假睡／する。四時頃再び外出して南門ニ比較／的近かい破風の壁の赤い大きな廟を／八ツ切にスケッチする。此廟は甚だ荒れ／本尊等は何もなく、厩にされて居た／跡がある。樹上には鳥が鳴き交はし、／脊を射る斜陽は夏の様である。／六時頃小林氏等帰着。／

二日。半晴。昨夜来風。□。／小林氏は昨日の続きを画くとて單独で／トラックに乗り出発。昨夜は劇しい／風で朝起き出して見ると庭のアカシヤの木／が傾むいて居るのがある。／昨日の華表を続けて画く。鈴木君／も他の華表を少し離れて画いて居る。／十一時半終る。附近を散歩して見／るに小規模の防空壕が住家の／裏などに簡單ニ拵へてある。中には水／が溜まって入る事は出来ない。／兵站部の食事は九江よりはまた大分／異なった材料である。味噌汁も粉味／噌でホーレン草も乾物との事である。調味／料は多分鰯の粉なであらう。卵焼／が能く出るが甚だ赤味がかって無味／である。家鴨の卵であるさうな。広島で／餞別にもらった海苔の鑵を此所で／あけて皆ニ供した。／午后は諸處を歩るき廻った末、丘／山の警備部隊の三階へ上げてもらっ／て其所のヴェランダから丘の下の町の／家。昨日画いた赤い破風のある廟、／城壁と塔、其等を越えて鄱陽湖／や□山の横ニ長い對岸等／を入れたパノラマを水彩で描く。／五時頃完成。／夕方に至って風も止んだ。アカシヤ／の花が白ろい。／

三日。晴。暑。月、十四日、月蝕。／六時半起床。太陽未だ上らず。／今朝は小林氏と共に、往来の直ぐ／向ふの公園の丘に上り其所のあづま屋（実は／蔣介石の建てた石碑を蔽ふ東屋風の建物／であるが其の石碑は地上に抛げ出されて／うつぶせに倒れて居るので石碑面の文は／何が書かれてあるか知る事は出来ない。）の／下で廬山をスケッチする。香爐峯も、雲／の影の去来に従って著しく見へたり陰れた／りする。瀑布は何時も糸の如く白ろく／光る。頂上の一部には昨日から引続／き煙の上るのが見へる。残敵掃討の／兵隊が火を燃しつゝあるのか。十二時終／る。／石割少佐は呉何とか云ふ處へ出／発するとの事で埠頭迄見送る。渡辺／君も同道であるが此船には兵隊数／名、新聞記者、

地方人一二名、婦人一／名乗込み居たるは珍らしく思はる。無蓋／のトントン船で如何にも暑さうに見ゆ。／一度帰って再び今朝の廬山の水彩を／続ける。絵を見て居た兵隊が去った／後には鳥の声が四方を埋めた。鳩、／八哥、かさゝぎ、行々子に似た鳴声のもの、／かけす、四十雀、小雀、眞黒のもの等／種類も実に多い。四時繪を終る。労かれて／一時間ばかり寝る。夕方二階ベランダに上っ／て水彩スケッチ。夕食、入浴。

■この日は、月蝕を見て12時に就寝。

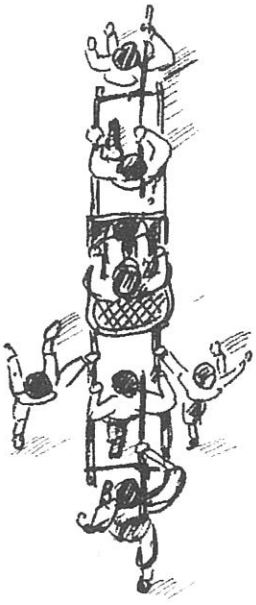
四日。晴。暑。／今日は九江へ帰る事に決めて居る。／実は此地の美しさは何時迄も居度いので／あるが廬山へ登る事もあるし、其れに大体／一ヶ月の豫定が大分延びて居里 帰京／を急ぐ気持が底ニあるからである。尤も／若し私と鈴木君だけであったら滞在は／まだ延びた事と思はれるが、小林氏／は蚊が出ること、食事のこと等が我々／よりは遥かに気ニなり、又た最も大切な／周囲の風景からも大した感慨が無い／（之れは蘇州でも南京でも同様で／あったが）ので兎角く帰途ニ就く／問題は小林氏の口から最初に／出る。之れが大なる原因で当初の／豫定の漢口行も遂ニ中止する事／ニなった。此の数日来暑氣が急劇／に加は里、まだコレラの発生も聞かないが／昨年の九江の話を聞くと恐ろしさも増す／次第であった。が何れにしても漢口ニ行かず／に帰るのは残念である。總てを他日に／残す。／兵隊さんから頼まれた絵葉書を昨日／数枚画いて之れを渡し、出張／所を後に華表の幾個を潜り、一寸／ポンペイの町を歩るく様な気持で／行く。町が南門ニ向って延びて人／家が盡きんとする前に、昨日から吾等／の眼を強く牽いて居る一軒の家がある。／家の間口は別に大きくも無く此附近のもの／と殆んど同様であるが、往来に面する／壁面に彫刻が多数に嵌め込まれてある。／テラコッタか赤石か分明しないが甚だ面／白ろく、人物の首等は破壊されてあるが／（此の破損は、此度の戦争に由るものではなく、／大分以前からと見へる）構図や衣の／襞等も非常に美しい。此地には／家の入口の上部の壁に何の目的か／知らぬが小さな出窓式のものがあって／小屋根を戴いて居る。それは皆な木製／であるが此家は此の細部が全部石造／であるのが珍らしい。又た全く装飾の為めに／表に彫刻ある青石の扉がシンメトリーに／二枚離れて嵌め込まれてある。入口は／別になって居る。家は大破して屋根も何／も無いが幸ひにして其の表通りに面する壁／面だけは損せられずに残って居る。如何／なる種類の家か知り度いが其れが分からな／い。家内の一部にはかまども有るから人が／住居して居たには相違無い。／

■八時出航の発動船に乗り込み、九江に向かう。途中で寄港のない直行便であるため、同日十二時半には九江の桟橋に到着。以前と同じ宿に入った。星子での数日を経験した後だけに、以前物々しく感じた九江に「甚だ和ごやか」だと感じている。

五月五日。晴。暑。／廬山に出発。差廻はされた自動車で／七時十五分出発。九江から山麓迄の道／路は平坦で甚だ宜く拵へられた道路で／ある。九江の郊外には樹木もあり、人家も／面白ろく、一

寸日本の村端れを通って居る／様である。九江の町端れでは警備兵／が一寸調べる。二三哩行った所に部落／があって日本兵か又は軍属かが滞って／居るのか洗濯物が沢山樹間に干してあ／る。小さな流れの上を渡る。此所には／清流が流れて居里 軍隊はトラック／で引きも切らず九江から水を汲みに来て居る。九／江の軍隊、民家に配給して居る水は之れで／あるらしい。畑の間の道を馳って蓮花洞／に達する。一寸した町である。之れは廬山の／麓であって其村端れが直ぐ登山口となって／居る。九江から三十分を要した。登山口の建／物には守備隊の兵隊が居て厳重に固／めて居る。此山が占領されたのはまだ前／月の十七八日の事であるから、最も新らしい／戦跡で其厳重さも左様なる可きだと思／はれる。自動車を下りると其所に吾／々の乗る可き駕籠が待って居る。之れも／軍の方で手配して置いて呉れたのであった。／入山証を守備隊に見せ駕籠に乗る。籐／椅子に二本の樫棒をつけた様なもので／嘗て印度ヒマラヤに登山した時に乗った／のとは形が多少異なる[12]。四人が一列／となって擔ぎ、豫□が二人ついて居て交代する。／

一名の護衛兵が銃を擔っ／てついて来て呉れる。／直きに石段に取りかゝる。／此附近、竹林、松林等が／道路の□側にある。然し其／れも少し登ると無くなり、多く／は灌木か草だけの山となる。／石段が数十あってはまた急な／土路となる。道幅は大概／一間内外であるが時ニは稍／々広い處もあり、又た難路と／なると二三尺位しかない處も／ある。一列になって擔ふ所以である。苦／力等は初めはお互に饒舌り合って居／たが急坂になると黙し、暫らくすると／呼吸の音が劇しく聞こえて来る。／三十分ばかり登った所に傍に息む建／物があり渓流が近かくを流れる。彼／等は其れに走って飲む。私も其所に／行って流下する清水を掬して飲ん／だ。支那に来て初めて飲む生ま水／である。また登る。路イヨく急。／石段も多い。一時間半ばかりした／時に月弓嶺に達した。右手の路傍の丘山に／石造のトーチカ、小砦とも云ふ可きものがある。／去る十七日の戦争では此所に居た支那兵は中々／頑強に抵抗して日本兵に六名の死者を出し／たと云ふ事で



まだ生新らしい墓標が路傍／に立てられてあった。／廬山の戦争の話を聞くに、日本軍は普通／の登山道路は危険なので其れには少しもよら／ず全く路無き場所を登って、山の角を形／造る岩の塊を占據し乍ら諸所ニ在った／支那兵を攻撃しつゝ山上に登って行ったの／ださうである。僅かに二日間で之れを占／め六名の戦死者を出したのみであるとの事／であった。櫻井上等兵の十八日戦死の墓標がある。／月弓嶺の路の□側には石造の人家が二／三軒ある。戦前には何に使はれてあった／か知らないが今は警備兵の一隊が在／って通行者を調べて居る。恰度佐／澤（中佐）部隊長が山上□嶺(Kuling)／の守備隊本部から下りて来て居たのに會ひ／氏は二三の兵と共に下山した。此所から今／ま登って来た方向を觀ると軍山、三角山、／（そば山は左の山ニ隠れて見へぬ。）又た／右手には近かく、此場所よりも稍々高い岩を頂く／峯があって、日本軍が一擧に此の山角を／占據して戦を有利に開いたと云ふ重要／地点を見る。遥かに麓には野あり森あり、／湖水があり、九江の町のかたまりと思はれ／る處や其れに続く□湖。揚子江は／帯の様に白ろく光り、其れを越へて広い／土地が山の様に天に続いて居る。湖／口の辺も蒼く見られる。又た一方、上／手を見ると最早や括嶺の町の一部／が山上の凹形の場所に細かく見へ／左手の峯にはラマ塔を仰ぎ見る。／此辺は道路は稍々平坦である／が左右の急カーブ多く、又た岩を／切って造った道路、急石段等の連／続で、諸所に丸木を四五本併べて／渡した橋もある。駕籠の幅は此の／橋よりも遥かに広く、下を覗けば千／仞の谷である。苦力の一人が若し躓／いたらば其の危険は知る可きである。／苦力等のシャツは汗が流れる。それでも／非常な元氣で、初めの速力と仝一の力／で進む。時には高い石段を一氣に走り／上る時さえもある。護衛の兵の背も汗にビッショリ／である。駕籠の上から之れ等を見るのは如何にも／相済まぬ感がする。然し駕籠の上も思った程／楽では無い。急坂の為め足は上に上り、背を／椅子の背にもたらすと顔は天を向いて船暈／に似たものを感じ頭を起こすと脚部と腹部／とは急角度を保たねばならず頸は非常に／苦るしい。しかも駕籠を支へる樫の棒は／長く、たゆむので常に駕籠は上下して腹の／底からゆられる心地がする。／麓附近には樹木も多かったが途中からは灌木／となり、□躅が淡紫、淡紅から濃牡丹／色に至る色取々に咲き盛って居る。月弓嶺の／少し上では石楠が美しく咲いて居るのも見た。／鳥も種々なものが飛び交ふ。漸やく岩／石が多くなり大きな塊が将碁の駒を横に／数十重ねた形で直立する。路は多く岩の／山腹をけづって造ったもので右方は深かい／渓で底には水が流れて居るらしい。誠に／初めて見る奇觀である。／□嶺の町に達す。警備兵にまた／入山証を示す。此所から人家が併ぶ／支那人経営の小旅館らしいものが最初に／目ニつく。ダージーリングの或部に酷似して／居ると思った。一寸した支那人町（まだ営／業して居る者は無ささうである）を過ぎて、再／び町をダラく下里別荘地帯に入る。石造／の立派な教会堂などがあって此の附近ハ／全く欧羅巴の田舎の如き觀がある。川／に沿って下って守備隊本部（蒋介石の／別荘）に行き手続きを了す。準尉の人が／親切に世話をして呉れる。此の別荘／は大きなものであるがさ迄立派とは／曰はれぬ。再び此所を出て吾々の旅／舎に当てられた偕行社に行く。石垣／の間、古い楊柳、其他の大きな樹木の下を大／分行った所であった。此建物は要人／熊式輝の別□であって規模は非常に／大きいと云ふ程では無いが占領された建物／中最も社交的に出来て居里、広い應接室／が数個併んで居里、最も清潔、且つ□／洒たるものであるさうな。／偕行社と云ってもまだやっと一週間前に／開かれたばかりで此建物に宿

泊したのは我／々が三人目だとの事である。（□嶺の入口で／下山する海軍々人に會ったが先程此所／を辞去したのだとの事）青木中尉が／今ま此社の長である。青木氏は新潟縣／高田市の人で、理学士、熊本医大、及／高等学校の教授で生物学専門ださう／な。甚だ謙譲慇懃な人で非常／な厚意を吾々に寄せられた。／二階の寝室に通された。寝台寝具、家／具一切 熊式輝が使用した儘である。／壁間には此人の婚礼の日の夫婦の寫眞、／シルクハットの新夫と白衣の洋服の新婦／である。又た夫人が幼児を抱へて／居る寫眞等がかゝた儘である。熊は／何れ英国の大学でも卒業した人であらう。／小憩の後ち窓外に見ゆる山頂の砦／に行って見る事にした。花崗石の砂が太／陽の反射を受けて眼を射て中々暑つか／った。此地は海抜一千メートルと云ふから／恰度軽井沢の高さに相当するが軽井／沢よ里も暑いかと思はれる[13]。今日が既に軽／井沢の八月と仝様の暑さである。砦は／低い燈台の如き形で見張の兵隊が／数名居て日の丸が風にひるがへって居る。／此所から眺める景色はまた甚だ大で／今日登って来た路、月弓嶺の砦、クーリンの／町、ラマ寺のある小天地の部落、諸別荘／等 皆な眼の下である。鉛筆スケッチ、寫眞／撮影の後下り、教会の隣りで開店して／居る店（聖書や天路歴程（支那文）等が／棚ニあった。）で寫眞など買って帰る。／往来の支那人は立ち止まって脱帽して挨／拶し、西洋人も挨拶するのが多い。／青木中尉は十八日此地占領と共に／此社の長たる事を命令されたので下山／する事も出来ず、荷物も未だ到着せず／全く戦装其儘であるとの事で見れば／地下足袋である。シャレた天津絨毯の花／模様の上を地下足袋で歩るくのは甚だ異様／であった。／風呂が用意されたと云ふので階下に下りる。立派／なバスルームであるがバスの湯は取り換へず、前／の人の這入った後へ、後から後から這入って行く／のである。従ってジャブくと湯を浴槽の外／に流さなければならぬ。床には模様入りの／リノリュームが敷詰めてあるが流した湯が／一パイ溜まって居る。室の一部分に間に合ひに／リノリュームも一緒に床へ直径二寸位の穴が／明けられてあった。急に穴を明けさせましたと／青木氏は笑って語った。／夕食は階下の大應接間の、甚だ大きな／円テーブルで吾等三人と青木中尉とで／食べる事になった。新らしい占領地先とは／思はれぬ程の御馳走であった。酒も極／く上等の物であった。料理人も無論／兵隊であるが余程其方の経験ある／人であると想はれる。無論九江の宿の／食事とは非常な差であるが、南京ホテ／ルのものよりもずっと上等である。海老／のフライが出たには意外であった。青木／氏も「実は冷凍魚が手に這入ったのは今日が初／めです」との話であった。小林氏も満足の様に／見受けられた。室にはサンデリヤの電燈が／ブラ下って居るが電氣はまだ□られてないので／蝋燭である。マンテルピースの上には九江焼／の観音像らしいものが置かれてあった。食後／雑談中軍曹が花瓶二個を持って来／て見せた。食器等は何れも上等品／であったが実に多量に此家に用意されて／あるとの事である。水道も此所には敷／かれ甚だ質のよい水が送られるのであるが／まだ休んで居る様子である。／中支派遣藤堂部隊／（□嶺偕行社）。歩兵中尉、青木幸治氏／熊本高等学校／仝　医大／教授、（新潟縣高田市）

六日。晴。暑。／

昨夜は安眠した。七時頃起きる。／実は軽井沢の事を思ひ、此の時期では／まだ寒冷であらうと考へて来たが全く／そんな事は無い。それで持参の毛糸／のチョッキも用をなさない。ベランダに／出る

と山の氣がすがくしく、軽井沢の夏の／朝と仝様な感覺である。青木氏も出／て来て紅茶を皆で飲む。朝食前に／こんなにのびくしたのは全く此旅行初／まってから最初である。すっかり避暑氣／分である。連中の撮影などする。／今日は下山する豫定である。朝食を済ま／せて迎かへの駕籠を待つ。イヨく出発。青／木氏は共に司令部迄来らる。司令部で司令／官以下諸氏に會って此所を出る。庭の緑草／に馬が遊び又た一間程の高さの石楠／が眞盛りである。日本の様に倭生では無／くヒマラヤのものヽ如く一本の幹が直立／して上部に枝が出る。色も淡紅のみでは／無い。カソリック會堂から下に来た伊太利人／の老神父は一寸帽子をとって何か挨拶／の言葉をかけて行過ぎる。小マーケットの／如き家の前に多勢の人が居る。昨日から此／所に男女の人だかりがあるが食料品の／配給でも受けるのかも知れぬ。町端れ／の守備の歩哨の居る處で大分手続きに手間／取った。其れは苦力全数十二名で宿舎を出／たのであるが途中苦力の申出でで荷物かつぎ／三名を増したので其の許可を司令部から新らたに／得無ければならなかったからである。鈴木君が司／令部に往復して完了して下山の途につく。帰途／の苦力は吾々自辨で其料金を拂ふ事になった。／一名八十銭づヽと云ふ事である。下山は苦力に／とっては稍々楽であらうと思はれるが乗って／居る者は余り違はない。此度は尻が常に籐椅／子から前に滑り落ち相になるので両側前に／突き出て居る握りを一生懸命に握って体を／後方に押しやる様にして居なければならない。／上下の動揺は中々烈しく腹にこたえる。本部／を十時に出発して稍々下った處、岩石の／畳々と重なった□路の場所で駕籠を止め、／其所から□嶺の町を振り返って見る風景を／油絵＃４に一時間寫生する。昨日登って来た／路を、仝じく二三度休息して一時半頃山麓／に帰着した。苦力等は腹を減らしてしきりに／めし、めしと吾々に乞ふが此の連花洞では／之等の苦力に食せしめるだけの米の余裕は無い／のださうで守備兵と特務部の人等との間に／大分問答があった様だが結果は如何なっ／たか分からない内に迎かへの自動車が来たの／で宿に急いだ。田園の眞中で鞄二個／をかヽえて居た特務機関の軍属が乞ふまヽ仝乗して九／江に帰着した。此所は甚だ暑い。湖面の夕景／とろける様な美彩を呈した。／

七日。暑。晴。／相変らず日の出美し。朝靄を透して見る眞赤／な太陽が煙水廟の柳の上にポカリと出た具／合はうっとりとする様な眺めである。朝飯前に／近所の裏町に出てスケッチブックに寫す。哀調の朝鮮／歌が廃屋の様な家の窓からもれる。未だ慰安所／に配されない朝鮮女の収容所らしい。帰途折襟／の縞シャツを買ふ。粗末な品であるが四円五十銭する。／東京自宅へ航空便の手紙を出さうと思い野戦／郵便局へ行ったら切手が賣切れで二三日しなければ／来ないと云ふ。宿ニ帰って切手を買い、憲兵隊の／□検閲を受けて再び郵便局ニ行く。（郵税三十銭）／鈴木君昨夜より風邪発熱。所柄吾等非常／に心配する。暑熱烈しく室内九十度を越へ／る。向来の事が心配され、愈々漢口行も／不安となり此地よ里帰朝の事、万全の様／に考へらるヽに至る。午后＃４に油絵で煙／水廟を画き出したが中止して兵站部に／出かけ千田氏に會ひ、鈴木君病氣の事、／又た帰途の船の事ニつきて談合す。幸に／明朝南京に下船する千山丸があるとの事で之れに乗込／む事に決め、手続きを依頼する。／夜 千田司令官に招かれ其官舎ニ於て／夕餐を供さる。小林氏と二人同道。千田氏の他／には山本、宮本 両中尉及他一名の尉官／（僧侶出身）がある。吾々を初め一同浴衣に／着代へさせられ畳の座

敷に坐る。（大工の兵隊／が吾等の到着する迄にと夕方五時頃迄かゝって／洋室に床の間を設け、畳敷（畳表のみなれ□）／に改造されたのだと云ふ。小林、私両名は／座蒲団□れ□司令官以下は座蒲団無し。／色々の馳走が出る。出来るだけの最上の／馳走と思はる。さしみも有ったが千田氏の／言葉に御馳走は何ニモ出来ないが衛生の／点は万全を期したから今夜だけは安心して／食事して呉れとの話であった。千田氏御／自慢の瓢箪の図など見せらる。此家は／元九江市長の様な役の人の住居であった／さうで扇風機が廻って居るのは珍らしい。／今夜の会食は甚だくつろいだ席で千田氏以／下面白ろい談話で終始された。非常な／厚意であった。／今夜は支那からの空襲があるとの事／で燈火管制が敷かれて居る。但し室は別に暗くもせず／（但し一時停電せり。燈火管制ノ為メカ否カ不明。南京ニ於／テモ之レニ似タ停電アリタリ。）／此の夕餐も終った。此家は町の東部の端に位する郊外／に近かい處で、人の棲まぬ九江の長い町を通って来たが／帰途は一の燈火も無く実に眞暗であった。時々歩哨の／銃剣がギラリと暗中に光る。帰宿して明朝出発の／荷造りにかゝり、十二時に終る。窓に黒布をかけ、電燈に／も黒い布をかけた下で、暑さにあへぎ乍ら荷造りするの／は中々の苦痛である。月が出たら空襲があらうか／と心配と多少の楽しみを持って待ったが遂に／事実になって現はれなかった。月甚だ淋しく／湖青寂。／

■８日は荷物船・千山丸に乗船し、九江から南京へ向かう。９日は、蕪湖の町を甲板からスケッチ。午後に南京に到着し、南京ホテルに入る。星子から帰った後の九江でも感じたと同様、再び目にした南京でも、戦線に近づいたと感じた最初の印象は消え、「大都会のゆったりした處」と感じている。10日は市内での買い物や翌日出発の打ち合わせ等をして過ごした。

十一日。曇。冷。／昨夜中大概荷造を終って今朝、軍／司令部の自動車の来るを待つ。司令部ニ寄り高級／副官歩兵大佐鈴木辰之助氏に會って礼を述べ／最高司令官に□を乞ひ停車場に至る。岡大佐／も来場（吾々の見送りも兼ね）、停車場司令官も／仝席□特別室で少憩。十時発車。雲低く／風景暗らし。鎮江で金山寺を遥かに眺め／蘇州ニ入れば風景俄然豊か也。既に三／週間を経て居るが往路の時は菜の花咲き楊／柳新芽で和らかであったが今は菜種は実□／黄色になり柳は鬱蒼とし、水田の一部には／苗代が見られる。以前骨組ばかりであった／水牛に依る水汲ひ場の小屋は多く新らしく／藁ぶきを終り近かき田植へを待つ形である。／連絡が無かったので上海では誰も来て居な／かった。恰度顔知合の運轉兵が自動車を／持って来て居たので之れを流用してホテルに入る。／アスターホテル三階A室（小林）B室（南）に入る。／入浴。雨田君来宿。上等兵になって居る。／夕食は久振りの御馳走であった。スケッチブック／を求めに出で、又た其隣家のゴルフ用品店で、ダン／ロップボール（ブルーフラッシュ）一打(19yen)を／買ふ。東京宅から四月十七日。廿五日両度の手紙／がホテル宛に来て居た。東京別に変り無し。／

五月十二日。土。晴。中温。／朝 雨田君来る。検便の事を頼む。運輸部の／志賀中佐を訪ひ、此所で小林氏は明日出航の長／崎行の連絡船に乗船する事ニ決し、小生及鈴木／君は十六日出航の瑞穂

丸（病院船）に乗船に／決める。松屋とか云ふ余程以前から当地で／開業せる牛肉屋ですき焼の昼食をする。吾々／三人の他に田代、雨田、運轉兵も一緒である。／龍華堂に依って水彩画紙を求む。之れから／龍華堂主人の案内で川向ふの元英国租／界に行く事とする。初めての行也。雨田、鈴木／君は他に行った後で同行出来なかった。／実に雑沓で、人道車道に人間が一パイになって／歩るいて居る。嘗て此附近は歩るいた事はある／が今日とは全く異なって居た。今は此租界に／逃げ込んだ支那人の数は夥しいもので／貴賤の分ちなく町に充満して居る。オクショ／ンと称する骨董屋の集合所とも云ふ可き／所に行って見る。別に常にオクションを行って／居るわけでも無い。有ゆる種類の古物が／実に處せまく置き列べられてある。玉の飾り／を六七個買ふ。（一個五十銭の割）。帰途／アストリヤで珈琲を飲み皆と別かれる。／夜七時片村少将の招待で新亜細亜ホテル／で支那飯の馳走になる。片村氏の他には物部大／佐、斎藤大佐、他に少佐一名、軍属（造船技師）一／名、（鈴木君も出席）が仝席。九時半帰宿。鈴／木と計算をする。新亜細亜ホテルは最近開業した／ものださうで甚だ繁昌して居る様子である。／

十三日。晴。中温。／小林氏上海丸で長崎へ出発。九時乗込、十時出帆。／埠頭甚だ雑沓、三等船客多し、出征者（入営者）で此船に／乗って内地へ立つのがある。一寸逆コースの様で異様にも／感ぜられた。雨田君も色々と世話をして見送った。／帰宿。少々労かれて午睡。夜散歩し北□路（？）／のダンスホールを見物した。／

十四日。晴。中。／崑山へ行度いと準備をしたが松林君が来ると云／ふので崑山行を中止して待つ。甚だ遺憾であったが／後に聞けば崑山附近は全く安全と云ふわけに／行かず中止する方が宜かったとの事であった。三人／で呉淞鎮へ行って見たが余り面白からず／直ちに自動車を江湾鎮に走らせた。荷物を／都と云ふ小飯店に預けて辨当を食べ附近を／歩るいて後ち橋の處から町の一角を水彩で初める。子供や／苦力等が多勢後方に立って見物し、遂に食べ物を擔ぎ／乍ら商ふ露店迄も来て其所に野店を据えたので／見物人は食べ物を買っては食ひ乍らの見物となった。／一寸日本内地では見られぬのんきな光景である。／終ってクリークの向側で松林、鈴木君が画いて居る／處に行って再び水彩で初める。帰途は此地か／ら出るバスに乗り試みる。上海神社前で他のバス／に乗換え帰る。松林君も一緒にホテルで夕食／す。後散歩。甚だ労かれ入浴、就寝。／

十五日。晴れ。中和。／午前中、志賀司令官、国広副官（中尉）に／会ひ、此所で瑞穂丸船長、及事務長に偶然／面会す。片村部隊に廻り斎藤大佐に会ふ。／氏の励めにて共にモーターボートに乗り瑞穂丸に行／き船室迄も大体取り決める。帰途渡辺兵／站に行き渡辺大佐に面会。昼餐を他の部員／一同と共に食堂ニ於て供さる。玉川少佐（広島／一中出身、私より二年後の卒業生とか）にも初めて／會合する。持参の色紙二枚を渡辺氏に贈る。／（後ち頼まれて三枚追加せ里）。国広中／尉よ里も依頼を受け仝部の為めに色紙三／枚を帰宿後画く。五時頃［　　］を試みて／見る。印度のもの□は甚だ簡單であった。料金二円。それでも／被労を回復した。夕食後散歩、後荷造。／

十六日。晴。乗船の日。／松林、雨田両君荷物を早やくより船迄運び呉／れる。愈々アスターホテルを出で大阪商船桟橋に／行き荷物の検査を済ませて乗込む。御用船／瑞穂丸は病院船に使はれて居て今日は傷／病兵七百を積み、其の多数は大阪へ上陸せしめるの／であると云ふ。／私の為めに斎藤大佐、渡辺大佐代理の少佐、／が見送って呉れ、志賀少佐、国広副官にも此所で／別辞を述ぶ。松林、雨田両君も出航前迄船／に来て居て撮影などして下船する。岸には上海／の婦人會の團体多数が旗を振って見送る。／傷病兵側から某士官（中佐？）が別かれの辞を／述べると婦人團体の中には涕泣頭を上げ／得ない者も多く見受けられた。万歳の声の内に／十二時十分前に解纜。風あり。上海バンド／の建物次第に□ざかる。呉淞に一時停／船。私の室は此船最上等の特別室で／寝室、應接室、風呂、便所が附属せるものである。／寝台が二個あるので鈴木君も此室ニ入る。入浴して九時／就寝。海に出て風は却って静かになる。今日の呉淞／沖のジャンクの帆送の数の多かったのは見ものであった。事務長／も未だ之れ程沢山のジャンクが江を右に左に□よぎるの／を見た事が無いと云って居た。／船長　伊藤兼吉氏（海軍豫備大尉）兵庫縣武庫郡住吉村花田1403.／事務長　森安茂徳氏／医長　陸軍々医大尉　本城興一郎氏。長崎県早岐町。／□司厨□長　宇都宮桝右エ門。／

■17日は、甲板で傷病兵を８号の油彩で画いた。18日、船は門司に入り、列車で広島着。鈴木と別れ、21日に東京へ立つまで広島に滞在。従軍日記は終わっている。

（ふじさきあや／当館学芸員）

【註】

1　1938(昭和13)年に軍の嘱託として上海に渡った中村研一、向井潤吉等か。彼等は「戦跡を見て今時事変を記録する戦争畫を描くといふ目的」で５月11日に上海に到着した（藤島武二「中支戦線雑感」『塔影』第14巻第７号)。

2　吉野丸の医長代理で、軍医少尉の川添安治医学博士（３月31日付・従軍日記　※以下、特に断らない場合、註釈の「日記」は従軍日記を指す)

3　内田錠太郎。内田は、1930(昭和５)年に、南が展覧会審査のため台湾に渡航した時の吉野丸の乗組員（３月31日付日記)

4　南等一行は、宇品の運輸部の間違いで、吉野丸に乗船当初、二等の共同船室をあてがわれた（３月31日付日記)。その後、川添医長代理のはからいで室換えはしてもらったものの、運輸部からの訂正や新たな船室の用意は行われなかった。

5　1935(昭和10)年４月１日－７日に広島県産業奨励館で開催した個展と考えられる。

6　南の広島の旧友で医師。

7　藤島は、前年の５月９日に上海に到着し、６月26日に東京に戻った。上海や蘇州、無錫、杭州などに滞在した(前掲「中支戦線雑感」)

8　６月１日付・南薫造日記に「石人を＃30に初む」とあり、帰国後間もなく石人を画題に再び制作している。

9　「路傍の楊柳の蔭で玄武湖の一部を越えて對岸の塔と寺を眺める風景を＃12に初める」（前日・23日付日記)

10　南のスケッチブック「従軍寫生」には、「石割氏スケッチに依る」と書き込まれた櫂を操る人物図がある。

11　1909(明治42)年３月、ウィンザーに滞在。

12　1916(大正５)年のヒマラヤ登山については、以下の自筆文がある。南薫造「ヒマラヤ山へ」『みづゑ』第136号

13　南は1934(昭和９)年頃から軽井沢や沓掛で夏を過ごすようになった。1935(昭和10)年から1942(昭和17)年までは、毎年沓掛の別荘に避暑に訪れている。

広 島 県 立 美 術 館　研 究 紀 要　第 8 号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.8

発 行 日　2005年３月31日

編集・発行　広 島 県 立 美 術 館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014　広島市中区上幟町2－22
2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel.082-221-6246　Fax.082-223-1444

印　　刷　大成印刷株式会社
〒731-0138　広島市安佐南区祇園３丁目24－17
Tel.082-875-3232